現在、未来、過去と海

愛田美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
現在、未来、過去と海

【Ｎコード】
Ｎ０３９４Ｇ

【作者名】
愛田美月

【あらすじ】
ある日、大学のマドンナに誘われ彼女の部屋を訪れた夏木涼。しかし、その部屋で涼は彼女の父親に奇妙なことを言われた「なぜ蘇る。どうして今もその姿なのだ」と。＊＊＊タイムトラベルものです。完結しました＊＊＊

プロローグ

春の夜。
海風が砂浜に座る二人に、潮の匂いを運んでくる。少し冷たい風がとても心地いい。
数十メートル先の車道に車が走り、車のヘッドライトが一瞬砂浜を照らして通り過ぎた。
二人のうち一人が砂浜に寝転がった。それを見た一人が言った。
「砂がつくぞ」
「別にいいよ。ついても」
寝転がった一人が答えた。そしてそのまま目を瞑る。
座ったままの一人がそんな様子を呆れた様にしばらく見つめていた。
砂浜によせてはかえす波の音が静かに、だが確かに辺りに響き渡る。
晴れ渡った夜空に大きな月と小さな星々。その光が砂浜に眠る一人と、座る一人を優しく照らす。
座る一人は眠る一人に、ゆっくり近づき眠る一人の顔を覗きこむ。
眠る一人の顔に影が落ちる。
「おい、寝てるのか？　こんなところで眠ると風邪ひくぞ」
だが眠る一人は反応しない。ゆっくりと静かな呼吸を繰り返しているだけだ。
座る一人は暫く眠る一人を唯見つめていた。
綺麗だ。
そう思った。
そしてゆっくりと、眠る一人に顔を近づけ、唇を重ねた……。

第一章　現実の世界

電気を消したリビングに、人の気配が二つあった。一人は男。そしてもう一人は女だった。二人はソファーの上で向かい合って互いに互いの唇で口を塞いでいた。

二人は一頻り、口付けを堪能した後、唇を離した。

少し息切れを起こした女が男に囁くように言う。

「うふふ。まだ、信じられない。夏木君が私の願いを聞き入れてくれるなんて」

「まだ始まったばかりだろう？　由香」

そう返した男、夏木涼（なつきりょう）はゆっくりと香田由香（こうだゆか）の首筋にキスをした。

今朝、涼は由香に声を掛けられた。同じ大学に通う彼女は美人で有名で、男子学生の高値の華だった。そんな彼女が人気の少ない裏庭で彼を呼びとめ、言ったのだ。あなたと一夜を共にしたいという彼女の願いを。

涼は意志の強そうな眉に、二重の丸い瞳、しっかりとした鼻に形の良い唇をしている。中々に整った顔立ちだ。高校でもモテていた涼だったが、女性の方からこういうことを言われたのは初めてだった。

涼は彼女にキスをしながら、彼女の胸のボタンを外していく。

その時、玄関の方から鍵を回す音が聞こえてきた。

二人は慌てて離れた。涼は由香に尋ねる。

「親の帰りは遅いんじゃなかったっけ？」

「そのはずなんだけど。……やばい、電気つけなきゃ」

そういうと、由香は胸のボタンをかけなおしつつ、電気をつけるために立ち上がった。

「おい、由香。誰か来ているのか」

男の声だった。たぶん由香の父親だろう。確か名の知れた小説家のはずだ。

由香は慌てて、涼の隣のソファーに座った。そしてリモコンを手に取り、テレビをつけた。
ちょうど良いタイミングで、リビングのドアが開いた。
「由香。お友達か？」
涼の姿を見咎めたのだろう、そう男の声が聞いてきた。
「あ、お父さん。お帰りなさい。早かったのね。この人はお友達の夏木涼君。すごいでしょう、お父さんのペンネームと同じ字を書くのよ。名前の読み方が違うだけで。で、その彼に、レポートを手伝ってもらったのよ」
由香は振り向いて、父にペラペラと嘘を並べていく。涼は呆れてその様子を見ていた。
一応挨拶しておくか。そう思って涼は立ち上がって振り向いた。
「始めまして」
あなたの娘さんに誘惑された男です。その言葉は胸中で言っておく。
涼は由香の父親と目が合った。眼鏡をかけたまあ、ダンディーともいえなく無い容貌の中年男性だった。だが、彼は涼と目が合った瞬間、理知的な瞳を驚愕に見開いた。そして呟く。
「……まさか」
そう言って、由香の父親は涼を凝視する。
「お父さん？　どうしたの」
由香が父親の異変に気づいたようだ。涼も訝しげに由香の父を見返した。
由香の父親は顔を青ざめさせ、腕を震わせていた。
「お父さん？」
もう一度、由香が父を呼んだ。
「何故お前まで蘇る？　何故今もその姿なんだ」
いきなり由香の父が叫んだ。驚く涼に詰め寄ると、肩を掴んでドアに向かって突き飛ばす。
「なぜ今更現れる。娘に何をする気だ！　復讐か？　そうなんだろ

う」
　涼は顔を顰めた。ドアにぶつかり背中が痛い。それにしても、いきなりこの人は何なのだろう。
　娘に手を出したと怒っているのか？　だが彼の口走る言動は、甚だ理解不能だ。
　蘇るとか、復讐だとか何を言っているのだ。そもそも涼は彼と初対面だ。
「お父さん。どうしたのよ。ねぇ、どうしちゃったのっ」
　由香が叫んだ。顔は泣きそうにゆがんでいる。彼女の父は荒い息をしながら、娘の声を無視して叫んだ。
「さっさと出て行け。二度と俺達の前に姿を見せるな。出てけ」
　涼は何も言わなかった。一度、青白い顔の由香の父を睨みつけ、そのまま家を後にした。
　住宅街の道を大通りに向って突き進む。気分が悪い。確かに彼は娘に手をだそうとした。父親としては敵に等しい存在なのかもしれない。だが、涼はその娘に誘われただけで、あそこまで言われる筋合いは無いはずだ。
　まったく、胸くそ悪い。誰かに八つ当たりしたい気分だ。
「まって、待って夏木君」
　後ろからそう呼ばれ振り向くと、はだしにサンダルを履いた由香が走ってくるのが見えた。
　涼は立ち止まり、彼女が追いつくのを待つ。
「ゴメンね、夏木君。お父さんいつもはあんなじゃないの。もっと冷静で、知性的な人なのに」
　由香の声がだんだんと小さくなる。涼はそんな彼女を見つめ、言った。
「言うことはそれだけ？」
　涼の言葉に、由香は目を見張る。そしてすぐに口を開いた。
「あの、ごめんなさい。私から誘っておいて、こんなことになるなんて。でも次は絶対こんなこと無いようにするから。だから……」

涼は言い募る彼女に、無表情に顔を向けて静かに彼女の言葉を遮った。
「次はないよ。君のお父さんに娘に近寄るなって言われたし、あの異常なお父さんに殺されたくないしね」
「ころっ……、殺したりしないわ。お父さんはそんなことしない。お父さんは優しい人よ」
「そう？　ならそのやさしいお父さんと末永く幸せに暮らしてくれ。俺は関わりたくない」
そう言って、涼は由香に背を向けた。由香の視線が背中に突き刺さっているのは感じるが、涼は振り向かなかった。
暫く歩いた時、由香の怒鳴り声が聞こえた。
「あなた、最低よ」
涼は顔を顰めたが、振り向かなかった。そのまま角を曲がった。振り向いても彼女の姿が見えなくなるように。
「最低なのは俺の気分だよ」
涼は街灯の明かりの下、そう呟いた。
ここをまっすぐ行けば、大通りに出る。
ヘッドライトの群れがもうすぐ見えるだろう。
涼はふと、由香の父が口にした奇妙な言葉を思い出した。
『なぜお前まで蘇る？　なぜ今もまだその姿なんだ』
お前まで、ということは他にも彼が蘇ったと思った人物がいたということなのだろうか？　それに、もう一つの奇妙な言葉。何故今もまだ同じ姿なんだ……。
もしかしたら、昔、自分に似た人物がいたのかも知れない。その人物は由香の父親に復讐したくなるようなことをされたのだろうか？
涼はその奇妙な言葉に考えをめぐらせていたが、首を振って思考を吹き飛ばした。
考えても何も分かるわけが無い。涼は由香の父親ではないのだから。気にはなるが、また戻って聞くわけにも行かない。何せ、由香

をこっぴどくふった後なのだ。
涼はもう一度首を振った。
そして、顔を上げると駅へ向かって歩き始めた。
家に着くと涼は服も着替えずに、ベッドに倒れこんだ。
今日は疲れた。せっかく大学一の美女と良い事出来るはずだったのに。とんだ肩透かしをくらってしまった。
そう考えると、余計に脱力感が身体を襲う。
身体の向きを変えようと身動きした拍子に、目に入ったのは電話機のルス録ボタン。そのボタンが点滅していた。
涼は逡巡した後、ベッドから起き上がり、ルス録ボタンを押した。
機械の声が「一件です」と告げて、録音されたメッセージが再生される。
『涼、こんな時間まで何処をほっつき歩いているんだ。夏木家の人間として恥じない生活を送れとあれほど言っているだろう。全くお前はあの女に似て、あ……』
父親の声だった。涼の大嫌いな父親の。父は口を開けばお前はあの女の子どもだからと言って、涼を蔑む。
涼は録音されたメッセージを途中で消去して、大きくため息をついた。ベッドに腰掛け、物思いに耽る。
大学に受かったと同時に家を出て、一人暮らしを始めても、こうして月に一度は父親から電話がかかってくる。
一人になれば、父親から開放されると思っていたのに、結局大学の費用も、家賃も父親に頼るしかない。
そんな自分が嫌で嫌でたまらない。だからといって、大学を辞めて自立しようとも思えない。臆病者なのだ、自分は。
涼はふと、先ほど別れた由香を思い出す。彼女は本当に父を好いている様に思えた。常軌を逸した父親の言動を聞いていたにも関わらず、父親を庇っていた。
自分にそんなことは出来ない。そして少し羨ましい。そう思ってしまう自分もまた嫌だった。

翌日の昼過ぎ、涼は友人と共に、学食で食事をとっていた。今日のB定食は豚のしょうが焼きと、フルーツサラダに味噌汁とご飯だった。
涼はフルーツサラダに入っていたミカンを、友人の器にそっと移していた。
その時その友人が、涼に顔を向けて口を開いた。
「おい、涼。お前は子どもか。人の皿に入れるな、ミカンを」
「片瀬ー、硬いこと言うなよ」
涼が苦笑いしながら友人を見ると、友人は渋い顔を向けてくる。
だが諦めたようにため息をつくと何かを思い出したように、にやけた表情を作った。涼に向かって身を乗り出した。そして小声で涼に言う。
「なあ、昨日、香田と寝たんだろう？　どうだった彼女」
涼はその言葉を聴いて、憮然とした。そういえばこの友人には話したのだ。香田由香に誘惑されたと。友人のいやらしくたれた目を半ば睨みつけるようにして、涼が口を開く。
「してねーよ」
そう言うと、驚いたように友人は目を見開いた。
「うそ、お前マジかよ。何で？　いつも手ぇ早い癖に」
「煩いな。親父に見つかったんだよ」
憮然としたまま答えると、友人はニヤリと笑った。
「ははーん。日ごろの行いだな。それは」
「はあ？」
「日ごろの行いが悪いから、そういう不幸に見舞われるんだ。惜しかったな学校一の美女をものに出来そうだったのに。可哀そうに」
そういいながら、同情というよりは面白がっている表情をしてい

る友人を、涼は本気で睨んだ。
その時である。食堂の入り口付近から涼の名を呼ぶ女性の声が、辺りに響き渡ったのは。
その声には聞き覚えがあった。友人がその人物の名を呼んだ。
「香田由香」
涼は振り返った。
普段、ブランド物の服でその身を着飾っている由香だが、今日はどうやら違ったようだ。髪を振り乱し、化粧けの無い顔で涼の姿を探している。
「夏木涼。何処なの？　いるんでしょう。出てきなさいよ。この人殺し」
由香の言葉にその場が一瞬静まりかえり、そして、騒然となった。
「おい、涼。お前いつの間に人殺しになったんだ」
からかう口調の友人を無視して、涼は立ち上がった。その涼を目に止めて、由香が走り寄ってくる。
涼の前に来た由香は勢い良く手を振り上げて、涼の頬を平手で打った。
涼は痛みに顔を顰めて由香を見る。
人殺しと言われる理由も、殴られる覚えも無い。いや、殴られる覚えなら少しはあるが。
「あんたのせいよ」
由香が叫んだ。大きな瞳に、見る間に涙が溜まり零れ落ちた。
「あんたのせいよ」
由香は泣きながら涼の腕を掴んで揺らし始めた。
騒然となった食堂の中、数多くの視線を受けながら、涼は戸惑っていた。
一体何なのだろうか。昨日といい、今日といい、一体何があったと言うのだろう。
あんたのせいだと喚き続ける由香を、どうしていいのかもわからないほど、涼は混乱していた。

その時、最初は呆気にとられて見ていた友人が立ちあがり、由香を諌める様に口を開く。
「おい、香田。一体どうしたんだよ、落ち着けよ」
そう言って、由香を無理やり引き剥がしてくれた。
由香は暫く、友人の腕の中でもがいていたが、やがて諦めた様に大人しくなった。
「香田。一体何だよ。この騒ぎ。お前を拒んだ俺へのあてつけか」
涼の言葉に、由香は何度も首を振り、そしゆっくり膝をついて床に座り込んでしまった。そのまま大声で泣き出した。
涼は友人と目を合わせる。友人は肩を竦めた。もうどうしようもないとでも言いたげに。
涼は膝をついて、由香の肩に手を置いて話しかけた。
「なあ、香田。いったいどうしたんだよ」
涼の声に、由香は顔を上げた。由香は涼を睨みつけるようにその潤んだ瞳を向けて、嗚咽をかみ殺しながら呟いた。
「死んだのよ……」
呟く様にいわれた由香の言葉に、涼は眉を寄せる。由香がなおも口を開く。さっきよりも聞き取りやすい大きな声で、こう叫んだ。
「死んだのよお父さんが。あなたのせいで」
そう言ってまた大声で泣き出した。涼は彼女の言った意味が分からず戸惑った。
由香の父親が死んだ？　昨日会ったばかりのあの男が。少し情緒不安定のようだったあの由香の父親が。
「死んだ？　まさか……」
暫くして泣き崩れてしまった由香を、駆けつけた学校の職員が取り囲んで彼女を食堂から連れ出した。
それを見送りながら、涼は彼女の言葉が頭から離れず、暫くその場で石のように固まっていた。
死んだ。

あの父親が。
死んだ？
一体どうして。
どうしてそれが俺のせいなのだろうか。

第二章　世界の入り口

由香の父は彼女の言葉のとおり、亡くなっていた。
彼の死は夕刊に、小さな記事で載っていた。
『有名作家　突然の死』
そういう見出しだった。
由香の父は今朝、自宅のガレージで首吊り自殺していたのだという。
どうしてそれが俺のせいになるのだろう。
そんな疑問が解消されたのは、涼の家に刑事だと名乗る二人の男が現れてからだった。
涼は訳のわからぬまま、任意同行を求められ、警察署に連れて行かれた。
生まれて初めて取調室とやらに入れられて、涼は中年の刑事から一枚の紙を手渡された。
それは香田の父親が残した遺書のコピーだった。
涼はそのコピーに目を走らせ、どうして自分が呼ばれたのかが分った。
遺書に、自分の名が記されていたのだ。
遺書の内容はこうだ。

『俺は、殺されはしない。それが俺の起こした行動のせいだとしても。俺は他人に自分の命をささげる趣味は無い。全ては俺のものだ。俺はお前に殺されはしない。お前が何故今更蘇ったのかは分らないが、俺の人生は俺のものだ。夏木涼まであの頃と寸分たがわぬ姿で現れた時には驚いたが、それでお前の意図は分ったよ。お前は、いや、お前達は俺に復讐しに来たのだと。
だから俺はお前達に殺される前に自ら命を断つ。
あの頃と同じように、お前達は俺に何一つ報いることは出来ない

のだ』

そこで文章は途切れていた。

どこか中途半端な気がするが、手渡された紙は一枚きりだった。

「夏木君。君の名前が書いてあるが、何か心当たりは？」

読み終わったのを見て取ったのか、中年の刑事が真正面のイスに座って声を掛けてきた。

涼は首を振った。

「いいえ。心当たりはありません」

「そんな訳無いだろう」

涼が中年刑事の質問に否定した途端。中年刑事の横に立っていた三十代前半くらいの刑事が声を張り上げた。

一瞬驚きの表情をした涼だったが、すぐに平静な表情に戻る。

怒鳴り声には慣れていた。実家にいる間はいつも父の怒声を浴びていたから。

「ここに名前が書いてあるじゃないか。無関係とは言わせないぞ！」

「でも、俺は本当に無関係なんです。昨日初めて会ったのも本当なんだ。それなのに……」

涼は思い出していた。昨日初めて会ったときのことを。

彼は涼を見たときなんと言っていた？

何故お前まで蘇る？　何故今もその姿なんだ。そう言っていた気がする。

この遺書にも似たような表現が使われていた。

夏木涼もあの頃と寸分違わぬ姿で……そう書いてあった。一体それはどういう意味なのか。

何を示していると言うのだろうか。

「おい、夏木君。どうかしたのかね」

中年の刑事がおっとりとした口調でそう尋ねる。

涼は顔を上げた。

「昨日のこと思い出していたんです」

そう切り出して、涼は昨夜あった出来事の重要な点だけを刑事たちに告げた。
「何故蘇る？　そう言われたのか」
「はい」
「根津さん。遺書にもそんなことが書いてありますよ」
若い方の刑事が言った。
中年の刑事は難しい顔をして黙りこくってしまった。

しばらくして涼は警察署を出た。
あの後二三質問されたが、すぐに釈放された。どうやら警察の中では、一つの仮説が出来上がったようだ。
その仮説とはこういうことらしい。
神経に異常をきたした作家が現実と想像の世界をごちゃ混ぜにし、たまたま昨日あったばかりの涼の名前を遺書に入れた……。
だが本当にそうなのだろうか？　と涼は思う。
確かに昨日の印象で言えば、涼にも香田の父は異常に見えた。
だがそれまではいたってまともだったという。涼の出現が彼を狂気へと誘ってしまったとでも言うのだろうか？　では何故？
考えても分らない事だらけだ。
涼は警察署を振り返る。
暗い夜の中で、照明によって浮かび上がった警察署は、やけに殺伐として見えた。
警察署の門を出たところで、見覚えのある車を見つけて涼は顔を歪めた。
「親父……」
その声に反応したかの様に、運転席のドアが開いた。運転手は外に出ると後部座席のドアを開いて丁寧に浅いお辞儀をする。そして後部座席から出てきたのは紛れも無く父の姿だった。

父は体格の良い体をスーツに包み、醜く皺の浮いた顔に渋面を作っていた。涼の前に立った父親は渋面のまま口を開いた。
「涼。貴様、どれだけワシに恥じをかかせれば気が済むんだ」
その怒鳴り声とほぼ同時に、涼は頬に鋭い痛みを感じた。
父親に拳で殴り飛ばされたのだ。
「痛っ……」
痛みを感じた後、じわじわと口の中に鉄錆のような味が広がった。
「お前には二度と好き勝手させん。お前のような奴は鎖で繋いでいないと、何をしでかすか分かった物ではないからな」
「俺は何もしていない」
父を見上げるように睨みつけ、涼はそう返していた。
「警察に呼ばれるようなまねをしているではないか！　夏木家の人間ともあろうものが何という様だ。全くお前は母親そっくりだな、頭が悪く使い物にならん」
涼は無意識のうちに胸を押さえていた。小さい頃から言われ続けている言葉。
心にまた新しい傷がつき、血が流れていても、涼は父に言い返すことが出来ない。
怖いのだ。父が怖い。小さい頃から培われてきた恐怖に、涼は対抗する術を見出せないでいる。何も言い返さず俯いた涼を見て満足したのか、父は涼から運転手に視線を移した。
「おい、梶谷。涼を車に乗せろ。家へ帰る」
それだけ言うと父親は涼に見向きもせず、車に乗り込んだ。
それをただ見ていた涼は、運転手がこちらに近づいてくるのに気づき慌てた。
逃げなければ。
咄嗟に頭に浮かんだ言葉はそれだった。
涼は頭に浮かんだ言葉を実行するために走り出した。
虚をつかれた顔をした運転手にわざとぶつかって転ばせ、涼は車の脇を通り抜け、細い路地へ曲がった。

遠く父の叱咤する声が聞こえたが、足は止めない。
涼は車が入れない細い路地を走った。
走って走って、走り疲れた頃、ようやく足を止めた。
コレで暫くは追って来れないだろう。
そう思って涼は膝に手を当てて、荒い呼吸が収まるのを待つ。
ふと、ここは何処だろうと思い、辺りを見回す。
見覚えのある場所だった。
涼の家から差ほど離れていない。涼の家を基準にいうと、駅とは反対方向で普段は滅多に足を運ばない地域だ。
どうしよう。家に帰ろうか。
そう思ったが、足は動かなかった。
父が先回りして涼の家の前にいるかもしれない。いや、抜け目無い父のことだ。十中八九いるはずだ。
そうなると、家にも帰れない。
所持金も確か千円かそこら。どこかに泊まることもできない。
涼は暫く考え口元に手をやった。
「痛っ」
頬の上から傷口に手をあててしまったのだ。
父に殴られたときできた傷のことなどすっかり忘れていた。逃げることしか考えられなかったから。
だが傷のことを思い出してしまった途端傷か疼きだす。口の中に広がった血の味が気持ち悪い。どこかでうがいでも出来ないものか。
涼は辺りを見回して、思い出した。
確かこの近くに公園があったはずだ。
そこに水道もあった。涼は思いつくと同時にその公園へと足を向けた。
五分とかからずその公園に着いた。
日中、子供たちがはしゃぎまわっているはずの公園は、今はとても静かだ。
公園を取り巻くように植えられた木々の葉擦れの音が、やけに大

きく涼の耳に入ってくる。
その音に混じって何かが軋む音が聞える。涼はそちらに顔を向けた。そこにはブランコがある。
風のせいか、ブランコはゆっくりと揺れていた。
街灯があるお蔭で、公園の中はさほど暗くは無い。だが十分な明るさでもないこの空間がやけに寂しく見えた。
涼は公園の奥にある水道へと足を向けた。
誰も居ない遊具場を抜けて、広場へ出る。
広場の隅。洗面台の様に鏡の付いた手洗い場がそこにはあった。
三つ並んだうちの真ん中の蛇口に手を伸ばし、捻った。
勢い良く水が飛び出し、下に当たった飛沫が跳ねる。
涼は流れ出る水に手を差し入れ、顔を洗った。そして今度は手に掬った水を口に含んで、吐き出した。
ここまで届く街灯の光で、吐き出した水に血が混じっているのが分かった。
くそっ。思いっきり殴りやがって。
排水溝に流れていく水を見ながらそんなことを思う。
それにしても静かだ。
聞えてくる音といえば、蛇口から勢い良く流れ出る水音と、木々の擦れる音だけ。
まるで今、この世に自分だけしかいないような気になってくる。
いっそそうなってくれればいいと思う。
もう何もかもイヤだった。
父に縛られるのも、人と関わりあうのもゴメンだ。
一人になれば自由になれるのだろうか。
だが、そんなこと出来るはずも、一人で生きる勇気も無い。
涼は目を上げた。
鏡に映った自分と目が合う。情け無い顔をした男がそこにいた。
父親に頭が上がらず、一人では何も出来ない臆病者で……。
父のいない世界へ行けたらいいのに。

そしたら俺は変われるんじゃないだろうか。
「オヤジのいない世界へ行けたら……行きたい」
涼は言葉に出してそう呟いた。呟いたからと言って、それが現実になる訳はないのに。
涼は自嘲気味に笑った。鏡に映った自分の笑う姿が情けなくて、涼は流したままだった水を掬って鏡に勢い良くぶつけた。
濡れた鏡は涼の表情をはっきりと映せない。
それを見て、涼は少し落ち着いた。
何をしているのだろうか。自分は。
「バカみたいだ」
そう呟いた時、不意に目の前が赤く染まった。
驚いて顔を上げた涼の目に映ったのは、信じられない現象だった。
鏡が赤く光っていた。水の伝った鏡だけが赤く。
鏡が自ら光るなんてありえるのか？
この明かりが反射によるもので無いことは明らかだった。
涼の背後にも左右にも赤い光の光源は見当たらない。
涼は驚きの余り動けず、赤い光を発する鏡を見つめていた。
暫く見つめていると赤い光は弱まり、次第に鏡が何かを映し出した。
だが鏡が映し出したのは、涼の姿ではなかった。
人が立っていた。涼とは似ても似つかない男。涼と年齢はたいして変わらないだろう。彼の背景は赤く染まっている。日の出の時間か夕方なのだろう。だが何故そんな映像が鏡に映っているのか？
誰かの悪戯か？　鏡と見せかけて本当はテレビの画面とか……
涼はその鏡に触れてみることにした。
鏡に触れようと伸ばした手に、予期した感触が無かった。手首まで鏡の中に吸い込まれ、涼はパニックに陥った。
「う、嘘だろ、おいっ」
必死で鏡から腕を出そうともがくが、どういう力が働いているのか、手は抜けるどころかどんどんと中へ入っていってしまう。

「おい、止めろ。誰か助けっ……」
悲鳴に近い声を上げたが、その途中で涼の身体は物凄い勢いで鏡の中へと吸い込まれてしまった。
涼を吸い込んだ鏡は暫く赤い光を放っていたが、それは次第に弱まり普段の何の変哲も無い鏡へと戻った。
まるでここには始めから誰も居なかったかのような静寂が、公園を包んだ。
唯一つその静寂を破っているのは、栓の開かれた蛇口から出る、水音だけだった。

第三章　鏡の中の過去

吸い込まれると思った刹那、涼は吸い込まれた勢いのまま、どこかに出て誰かと思い切りぶつかった。
そしてそのまま地面に倒れこんでしまった。
「いってー」
「お、重い」
下から声が聞こえ、涼は驚き、いつの間にか閉じていた目を開けた。
目の前に顔があった。
一瞬胸がドキリと鳴ったのは思いのほか近くにあった顔のせいか、それとも間近に見た顔が整っていたせいなのか。
涼の前にあったのは男性の顔ではあったが、とても綺麗な顔立ちだった。
くっきりとした二重の切れ長の瞳。すっと伸びた鼻筋に、ふっくらとした形の良い唇。
じっと見つめていたのを怪訝に感じたのだろう、男は口を開いた。
「あの、重いんだけど」
「え？」
「だから早く退いてくれないかな」
「ああ、悪い」
涼は慌てて立ち上がった。どうやら、涼は鏡から出た勢いで、この男を押し倒していたらしい。
涼は男に手を差し出した。思った以上に細い手首を掴んで立ち上がらせた。
赤い夕日に照らし出された男の顔が微笑だ。そこまで見て、涼は気づいた。赤い夕日だって？　さっきまで夜だったはずだ。ありえない。周りを見回すと、どこかさっきまで居た公園と少し違う気がする。明るさが違うのだから印象も違うはずなのだが、だがそれだ

けでは無い。どこか、何かが違う。近くにこの男以外、人の姿が見えないのも気になった。
パニックに陥りかけた涼に、男が声を掛けた。
「焦らなくていいよ。君は未来から来たんだろう」
「は？　未来だって？　お前何言ってんだ」
涼はコイツおかしいんじゃないかと男を見る。男はいたって真面目な顔で、涼に言った。
「でも、君も気づいているだろう？　ここは君が居た世界じゃないって」
涼は男を見た。男にしては綺麗過ぎるきらいのあるその顔からは、感情が読めない。
「お前一体何者なんだ」
「僕？　僕は香田由弥（こうだよしや）」
香田と聞いて涼を人殺しとなじった由香の顔が浮かんだ。胸が疼く。だがそれを振り切る様に、涼は男に言う。
「名前じゃねーよ。お前、俺がこの鏡から出てきたとこ見てたんだろう？　それで何でそんな冷静なんだよ」
涼は混乱した感情をぶつけるように、男に言った。
男は涼の言葉を平然と聞き流し、悠然と微笑んだ。
「十分驚いてるよ。まさか人が鏡から出てくるとは思わなかった。未来を映すだけの鏡だと思ってたんだけど」
コイツの言っていることがさっぱり分からない。涼は由弥と名乗った男をじっと見つめた。
今自分に起こっている状況を理解しようと頭を働かせる。
それをなんと思ったか、由弥は苦笑した。
「そんな怖い顔するなよ」
「悪かったな。もともとこういう顔だよ」
涼は仏頂面を作る。由弥はふっと息を吐いて涼に言った。
「考えてもしょうがないよ。家においで。分かるように説明するから」

涼は言われて逡巡した。本当にこの胡散臭い男について行っていいものか？　騙されているのではないかという思いが拭えない。
だがこの男の言う通り、本当にここが涼のいた世界とは別の世界だとしたら。涼にはこの男以外頼れる相手はいないのだ。
「どうする？　来る？」
由弥の問いに涼はぎこちなく頷いた。

公園を出るとまるで違う町並みだった。夜公園へ向かって歩いていた時にはあったはずのマンションは無くなり、田んぼが広がっている。そして近代的な一軒家のあった場所には、木造の日本家屋が建っていた。家ばかりだったはずの住宅街に田畑が多く目立ち、今まで涼のいた世界よりも随分と古臭い印象を受ける。何より道路がアスファルトで舗装されておらず、土がむき出しになっているのだから。
涼の頭に、由弥の言った君は未来から来たんだろうという言葉が思い浮かぶ。本当に、ここは違う世界なのか……。涼は改めて実感していた。だが、完全に涼のいた世界と異なっている訳ではなかった。実際さっき居た公園は、先ほどまで居た夜の公園と対して変わっていないように思えたし、公園の前にあるタバコ屋は大分新しく見えるものの、涼のいた世界と変わらずそこにあった。
暫く歩いていくと、広い屋敷の門の前で由弥は止まった。木の塀に囲まれたその家の門を由弥はくぐる。
「え？　ここかよ」
涼は入っていく由弥の背中を見ながら躊躇した。涼の家も結構大きいがこの家もデカイ。コイツ金持ちのボンボンなのかも。
そんな風に思っていた涼に気づいたのか、由弥は振り返って涼を呼んだ。
「早く入って」
涼はその言葉に従った。由弥は玄関の扉を横に開いた。
広い玄関に、涼も由弥の後に続いて入る。

「ただいま」
由弥は家の奥に向かって声を張り上げた。
すると奥から若い女性が姿を現した。白いワンピースを着た、涼と差ほど年の変わらない女性だった。
「お帰りなさい、由弥さん。あら、お友達？」
奥の部屋から出てきた女性は由弥から、涼に視線を移してそう言った。
涼が戸惑って何も口に出来ずにいると、由弥が代わりに口を開いた。
「そうだよ、姉さん。僕の文通相手。こっちに遊びに来てくれたんだ。暫く家に泊まってもらうことにしたから」
「まあ、そうなの？　それならもっと早くに言って頂戴」
由弥が姉さんと呼んだ女性は由弥に眉を寄せた顔でそう言って、今度は涼に笑顔を向けた。
由弥の姉は、確かに由弥と似た顔立ちをしていた。薄化粧した顔立ちは優しげで、中々に魅力的な女性だが、顔の造作の美しさで言えば、弟の方が勝るように思われた。
涼にそんな風に思われているとは知らない由弥の姉は、にっこりと笑顔作ったまま涼に話し掛ける。
「始めまして、私由弥の姉の由布子（ゆうこ）と申します」
「あ、どうも、始めまして。夏木涼です」
涼は頭を下げる。
そんな二人の挨拶を見て、由弥は苦笑したようだった。
「姉さん。こんなところで挨拶なんかしてないで、早く彼を家の中へ上げたいんだけれど」
「まあ、そうね。私ったら。由弥さん、夏木さんを客間に案内して。私お茶を入れるから」
そう言って由布子は涼に小さく会釈すると、足早に部屋の奥へ消えていった。
「さあ、上がって」

涼は由弥に言われるまま靴を脱ぎ、たたきへ上がる。由弥の後について、長い廊下を暫く歩いて、広い庭に面した部屋へ案内された。
庭にはたくさんの植木や花壇があり、色とりどりの花を咲かせいていた。それに池もある広い庭だ。
それだけ見て取った時、涼は由弥に呼ばれた。
「えっと、ナツキリョウ君だっけ？　とりあえずそこに座って」
涼は庭から室内に視線を戻す。
畳の上に置かれたどっしりとした四足のテーブルの前に、涼は胡坐をかいて座った。
由弥はその涼の正面に座る。
「ナツキリョウってどんな字を書くの？」
そう聞かれて、涼は面食らったものの、一応答える。
「春夏秋冬の夏に、植物の木。リョウは涼しいっていう漢字だよ」
そういうと、なぜか由弥は嬉しそうな表情を見せた。
「へぇ、すごいな」
「何が？」
涼が怪訝に思って聞くと、由弥は楽しそうに答えた。
「僕のペンネームと一緒だ。名前の読みは違うけどね」
「ペンネーム？」
「そう、小説を書いてるんだ」
「小説……」
涼の頭の中に、死んだ由香の父親の姿が浮かぶ。確か、由香も同じようなことを言っていた。
お父さんのペンネームと同じ漢字を書くのよ。名前の読みだけ違うけど……確かこんな感じだった。
もしかしてコイツが由香の父だなんてことが……あるわけないか。
涼は頭を振る。だが、由弥が言うように、自分が未来から来たのだとしたら、ここは涼にとっては過去の世界ということになるのではないだろうか。
だったらコイツが由香の父親の可能性もあるのでは無いか……、

名前だって香田だしな。
そう思って由弥の顔を涼はじっと見つめた。
「ああ、でも、小説を書いているといっても、趣味で書いているだけだから」
「ああ、そうなのか」
涼は一応そう答えたが、殆ど由弥の言葉は頭に入っていなかった。涼は由弥の顔を見ていたが、どうにも由香の父親の顔と重ならない。涼の父親は知的な顔立ちをしていたが、由弥のような繊細さは無かった。由弥の老けた顔を想像しても、由香の父親の顔とどうしても重ならなかった。
「どうした？　何を考えているんだ」
由弥がそう話し掛けてきた。涼ははっとして取り繕うように頭を振った。
「いや、何にも無い」
「そうか？　ならいいけど。単刀直入に聞いていいか？　夏木君」
「え？　ああ」
涼は由弥の言葉に、頷く。
「君のいた世界は西暦何年なんだ？」
「せ、西暦……二千三年、六月二十日」
涼は胸の鼓動が早まるのを感じながらそう答えた。
由弥は嬉しそうな表情を作った。
「すごい、アトムの生まれた年じゃないか」
「あ、アトム？」
思いもかけないことをいわれ、涼は一瞬思考を停止させる。再び活動し始めた頭で、何とかそれが、鉄人アトムのことでは無いかということに気づく。
「ああ、もしかして君たちの時代には廃れてしまっているのかな。鉄人アトム。手塚山治虫氏が書かれた素晴らしい作品の一つなんだけれど」
そう言って表情を少し曇らせた由弥に、涼は慌てて言った。

「し、知ってるよ。アトム。鉄人アトムだろう？　今年がアトム誕生の年だってんで、アニメもまたスタートしたし、宝塚にある手塚山治虫記念館で、アトムの生まれた日にアトムの目覚めを見るために、大勢の客が押し寄せたってニュースでやってるのを見た」
「手塚山治虫記念館？　宝塚って、あの大阪の宝塚女性歌劇団のあるあの場所か？」
「そう」
涼が頷くと、由弥は感心した様に頷いた。
「へぇ、あそこに出来るのか。記念館が」
「出来るのかって言うか、あるんだよ」
涼が言うと、由弥は首を振った。
「まだないよ。この時代には。僕が知らないだけかもしれないが、僕の知っている限り、そんなものが出来たとは聞いてない」
「でも、実際にニュースでは……」
言いかけた言葉を涼が飲み込んだのは、由弥が、涼に少し大きめな声で呼びかけたからだ。
「夏木君。今は千九百七十三年。昭和四十八年だよ」
「四、四十八年だ？　そんな訳あるか」
思わず涼は大声を上げていた。由弥はその声に顔を顰めたが、涼はそんなこと気にしてなんていられない。
四十八年っていったら、えーと、三十年も前じゃねーか！　ありえねー。
呆然とする涼に、由弥は眉根を寄せたまま声を掛ける。
「夏木君、でも本当に今日は昭和四十八年、四月二日だよ、疑うなら姉さんにでも聞いてみたらいい」
涼は首を振った。信じられなかったが、頭のどこかで、それが真実だということを受け入れ始めていた。
実際この家に来るまでの道すがら、現代と違う光景をいくつも目の当たりにしている。
そんな時襖の向こうから、由布子の声が聞えた。

「由弥さん。入るわよ」
由布子がにこやかな笑顔を湛えて入ってきた。
由布子は涼と由弥の前に緑茶の入った湯飲みを置いていくと、そのまま静かに出て行こうとする。
そんな姉に、由弥は声を掛けた。
「ありがとう、姉さん」
「どう致しまして。由弥さん。お夕飯お父様達が帰ってきてから食べようと思っていたから、まだ作っていないんだけれど。あなたたちだけ先に食べる？」
由布子の問いに、由弥は涼を見る。涼は途惑った。俺に返事しろってことか？
「どうする？　腹へっているなら作ってもらおうか」
由弥の言葉に、涼は激しく首を振った。
「い、いい。大丈夫です」
いきなり押しかけたくせに、そんな迷惑までかけられるわけが無いではないか。涼はそこまで無神経ではない。
由布子はそんな涼に笑って頷く。
「じゃあ、お夕飯できたら呼びますからね。その時両親を紹介しますね」
そう言って由布子は部屋を出て行った。
襖が閉まるのを待って、涼が囁く様にいった。
「なあ、本当に俺ここにいていい訳？　いつ帰れるかもわかんねぇのに」
「気にしなくていいよ。多分両親は君のこと喜んで迎えてくれると思う」
「え？」
どういう意味かと涼は問おうとしたが、先に由弥が口を開いた。
「本当に気にしなくていい。君がこっちにきてしまったのは、僕にも原因があるから」
涼は憮然とする。由弥の言っている意味がさっぱり分からない。

この奇妙な現象の何処に、由弥が関係しているというのか。
「そんな怖い顔するなよ。信じてくれないかも知れないが、僕には未来を覗く能力があるらしい」
「はあ？」
余りにも馬鹿馬鹿しい言葉に、涼はつい声を上げた。
由弥はそんな涼を苦笑して見る。一度湯飲みを持ち上げて、茶を飲んでから由弥は口を開いた。
「僕は昔から身体が弱かったんだ」
「はあ？　お前の話し、いちいち唐突過ぎて意味分かんねぇ」
苛立った様に涼は言うが、由弥は意に介した様子も無く、言葉を続ける。
「毎日毎日寝てばっかりだとさ、凄く退屈なんだよ、それで僕は姉に頼んで鏡を持って来てもらった」
「何で？」
つい話しに引き込まれて、涼が口を挟むと由弥は寂しげに笑って続きを口にする。
「外の景色を見るために。その頃は自分で立って歩くのも難しかったから、鏡をこうやって持って見ると外の道路とか町が見えるんだ」
由弥は言いながら鏡を顔の上に掲げ持つしぐさをする。涼は頷いた。頷いたがそれが今、自分の置かれている状況とどういう関係があるのだろうか。
「でもある時ふと、思ったんだ。こうやって鏡で外を見ていても、いつも同じ景色でつまらない、違う景色も見てみたいってね。そうやって毎日毎日願ってた。見えるようになったらいいのにってずっと。そしたらある日、鏡にまったく別の景色が映ったんだ。自分の姿じゃない、窓から見える景色でもない、別の街が」
「まさか」
つい口に出した涼に由弥は頷いた。
「そう、僕もまさかと思った。自分で願っていながらも、そんなこと起こるはずは無いと思っていたからね」

そこで由弥は一息つくと、また湯飲みを持ち上げた。口の中が渇いたのだろうか、二三回喉を上下させ、茶を飲む。
涼もつられて、湯飲みを手に取った。少し温(ぬる)くなったそれに口をつける。緑茶の香りと味が口いっぱいに広がった。いい茶葉を使っているようだ。
「でも驚きはすぐに嬉しさに変わった。僕はまだ子供だったし、願えば叶うこともあるんだって、素直にその不思議な現象を受け入れた」
涼は頷く、子供だから素直に受け入れられたのだろう。
「でも、次第にその光景がどうやら、未来を映しているようだということに気づいたんだ」
「どうやって？」
「ある日、鏡に映っていた玩具屋で、車の玩具を見つけた。もうなんていう名前の玩具か忘れたが、僕はそれが欲しくなってね。両親に買ってくれるように頼んだ」
「でも、それは売っていなかった？」
涼の言葉に、由弥は頷いた。
「そう、その時は両親が嘘を付いているんだと思ったんだけど、その三年後かな。退院して家でテレビを見ている時、その車の玩具のコマーシャルが流れていた。新発売でね」
涼は知らず知らずのうちに溜まっていたつばを飲み下す。
由弥は話し続けた。
「そういうことがいくつもあって、僕は悟ったんだ。僕は鏡を通して、未来を見ていたんだってね」
「信じられねぇ」
「そうだろうね。でも、君はここにいる。僕は今日、あの鏡の前で、声を聞いたんだ。多分君の声だと思うけど。それで、誰の声だろうって思って鏡を見たら、君が鏡に映ってた。夜だっただろう」
由弥は思い出していた。鏡が赤く光った瞬間、確かに涼にも由弥の顔が見えていた。

「でも、驚いたよ、君が鏡に手を伸ばしてきたと思った瞬間、君が目の前に現れたんだから」
そりゃあ、驚くだろう。だが、本当に、この話が真実なのだろうか。否、真実なのだろう。もうそれしか、この奇妙な現象を説明する術はない。
俺を騙すとしても、こんな手の込んだやり方を誰がするものか。
涼はそこまで考えて、大きなため息をついた。
「大丈夫。帰れるよ。僕が未来を覗けるのは一週間に一度のペースなんだ。それ以上やると体調が悪くなる。だから後七日したら、僕が君を未来へ帰してあげる」
涼のため息をこの状況に絶望してのものだと思ったのか、由弥は元気付けるようにそう言った。
未来へ帰れる。そう思ってほっとした瞬間、涼の頭に父親の顔が思い浮かんだ。
この場所なら、父と会うことも無いかもしれない。ここなら、父とのしがらみから抜け出して、自由に暮らせるかも知れない……。
だが、そんな考えを涼はすぐに打ち消した。
ここは自分の住む世界ではない。過去に住み着くなんて、出来るわけが無いではないか。こういう弱い心が、自分を過去の世界に飛ばしたのかもしれない。
自分が逃げたいと願ったから、こんなところに来てしまったに違いない。
だったら、これ以上逃げてばかりいていいのか？　そんな風に思えてきた。
「夏木君。大丈夫か？」
由弥の心配そうな声に、涼はいつの間にか俯けていた顔を上げた。
「ああ、大丈夫。何か、帰れるって聞いたら、すっきりした。ありがとうな。えっと……」
涼は少しすっきりとした顔付きで、由弥に笑顔を向けて言った。
だが、由弥をなんと呼んでいいのか迷って、言葉を濁した。

由弥は涼が名前を覚えていないと、勘違いしたのか口を開いた。
「香田由弥だよ。由弥でいい」
「ああ、じゃあ、由弥。ありがとう」
「お礼言われることじゃない。元は僕が原因なんだから」
苦笑交じりに言われて、涼はにやりとした笑顔を返した。
「ああ、そうか。そうだった」
「よかった。元気になってきたみたいだな。夏木君。七日間、ここに観光に来たつもりでいればいいよ。滅多に出来ないぞ、過去へ旅行するなんて」
冗談めかして言われた由弥の言葉に、涼は笑った。過去へ来て初めて声を出して笑った気がする。由弥もつられて笑顔を見せる。
そんな由弥に、涼は言った。
「由弥。お前も、俺のこと名前で呼べよ。おれら、仲のいい文通相手だろ」
「そうか。じゃあ、遠慮なく呼ばせてもらうよ」
その言葉に、涼は満足して頷く。涼はふと、由弥は今まで出来た友達の中で、一番美形なんじゃ無いだろうかと考えた。だが、そんなことを口には出さず、思っていたことを口にする。
「でも、俺、さっき文通相手って俺のこと紹介した時、ビックリしたぜ。今時文通かよって」
「涼の時代には文通はしないのか？」
聞かれて、涼は答える。
「いや、してる奴らもいると思うけど、今は殆ど、ケータイかメールで済ませるからな」
「ケータイ？　メール？」
由弥は訳が分らないという顔をする。
涼はその反応がおかしくて、気づかれないように少し笑う。尻ポケットに携帯電話を入れていたことを思い出し、それを取り出して、由弥に渡した。
「何これ？　スッゴク軽いな」

興味津々の顔つきで、由弥はケータイを持ち上げたり振ったりしている。
涼は由弥にケータイが電話であることを告げ、これでメールも送れると説明してやった。
しきりに感動している由弥の反応に嬉しくなり、涼は普段以上に饒舌になっていった。

第四章　出会い

涼は風呂に入った後、用意された部屋に入り、敷かれてあった布団の上に寝転がった。

そこは由弥の部屋の隣で、空き部屋なのだという。

涼は携帯電話の話で一頻り盛り上がった後のことを、なんとなく思い起こす。

あの後。涼は由布子に呼ばれ、由弥の両親を紹介された。

由弥の母は由弥と良く似た顔立ちだった。品のよさそうな婦人で、着物を着ていた。由弥達姉弟は母親似なのだろう。

由弥の父は少しふっくらとしているが、中々の美丈夫で、年輪を重ねた顔立ちには深みがあり、一見して理知的な印象を受ける。

話し方もユーモアがあり、知性を感じさせる。優しげな雰囲気は姉の由布子に受け継がれているようだった。

その両親とも、突然の訪問者である涼を当然というように歓迎してくれた。

それが少し不思議で、涼は食事の時に尋ねてみたのだ。

すると由弥の父は由弥を見て、言った。

「この子は病気がちだったせいか、ひとりも友達がいなくてね。こうやって家に友達を連れてくるのは初めてなんだよ。それが嬉しくてね」

父の答えに、由弥はやめてくださいと照れたような、それでいて拗ねているような声を出した。

その姿が可笑しくて、由弥以外の全員が笑い出したのだった。

そんなこんなで、涼は家族にも歓迎され、一週間は確実に平和に暮らせることを保障された。

涼は布団の中にもぐりこんで、寝返りを打った。

このままなら、本当に楽しい時がすごせそうだと思う。ただ、由弥が両親と楽しそうに話しているのをどこか、寂しく感じてしまう自

分もいるのだ。
涼は一家団欒の食事なんてしたことがない。父はいつも仕事で遅かったし、母はいつも誰かと遊びに出かけていた。子供の頃はいつも一人。兄は二人いたが、年が離れているせいか、ほとんどかまってもらえなかった。
本音を言うと、涼は由弥が羨ましかったのだ。
だからといって、本当に父と食事をしたいとは思わないが。
そんなことを考えているうちに、涼はうとうとし始めていた。そして本格的な眠りに落ちていった。

過去へ来て二日が過ぎ、三日目の朝。涼は由弥の不機嫌な声を聞き、目を覚ました。
遠くから聞えたその声は、どうやら食堂の方角から聞えてくるようだ。
涼は由弥から借りた服を着て、外へ出た。
勝手知ったる他人の家とは正にこのこと。涼は洗面所で歯を磨き、顔を洗う。寝癖を水で直して、洗面所を後にした。
やっとはっきりしてきた頭で、さっきの声は何だったのだろうと首を傾げた。
食堂に顔を出した涼は、イスに腰掛けて食事をしている由弥に声を掛けた。
「お早う」
「ああ、お早う」
だが由弥は返事をしたものの、その顔は不機嫌丸出しといった感じだ。声も何だか刺々しい。
「もう、由弥さん。そんな顔しないで頂戴。仕方が無いでしょう。またいつでもいけるじゃないの」
「お早うございます。由布子さん」

涼が台所から姿を現した由布子に声を掛ける。
顰め面して、由弥に注意していた由布子がこちらを向いて笑顔を作る。
「お早う。夏木さん。良く眠れました？」
「ええ、お蔭様で」
「それは良かったわ」
にっこり笑った由布子の笑顔が、いつもより数倍綺麗に見えて、涼は首を傾げたくなった。
良く見ると、由布子はいつもと違い、少し厚目に化粧しているようだ。それがまた上手いので、彼女の美貌が際立って見える。服装も、いつもの質素なものから、少し派手目のものに変わっていた。
「どこかへ、出かけるんですか」
テーブルの前のイスに腰掛けながら聞くと、由布子はにっこりと笑った。
「ええ、フィアンセと」
その言葉に涼は目を見張った。
「フィアンセって、由布子さん。婚約してたんですか」
由布子はその言葉に、それはもう嬉しそうに満面の笑みを浮かべた。
幸せそうだなと、涼は思った。だから、綺麗に見えたのか。恋する女は綺麗になるという言葉があったなと思い出す。
その時、隣に座って食事をしていた由弥が、不機嫌な声を出した。
「姉さん。今日は一緒に映画を見に行く約束していたのに」
涼は由弥を見た。普段は秀麗な顔に良く笑顔を乗せているのに、今日はやけに不機嫌だ。
「由弥。お前が不機嫌なのって、由布子さんがフィアンセと出かけるからか？」
その言葉に由弥は一瞬目を見開き、次いで顔を赤くして首を振った。
「違う。僕は姉さんが、約束を破るようなことをするから怒ってい

るんだ」
「だから、それは謝っているでしょう。急に決まったんだから」
「断ればいいじゃないか」
言い合いを始めた姉弟を暫く見ていた涼は、いい加減やめさせようと、口を開いた。
「由弥。お前、そのフィアンセに妬いてるんだろう。大好きなお姉さん取られると思って」
由弥の顔を見ながらそう言うと、由弥はより一層顔を赤く染めて、口をパクパクさせる。
絶句しているらしい。どうやら、涼の指摘は的を射ていたようだ。
涼は由布子を見た。由弥に視線を送っていた由布子は涼と目を合わせて、涼と同時に噴出した。
「あはははは、可笑しい。イヤね、由弥さん。あなた小学生の子供じゃないんだから」
「ち、違う、だから僕は……」
「よ、由弥、いい、今更言いつくろったって遅いって」
涼が笑いながら忠告してやると、由弥は押し黙った。
一頻り由布子と二人で笑ったあと、ようやく笑いが収まった頃に、玄関のチャイムが鳴った。
「あ、洋輔さんだわ」
そう言って嬉しそうに玄関の方に駆け出しかけた由布子は、途中で止まってこちらを振り向いた。
「夏木さんにも、紹介したいから一緒に来て」
嬉しそうにそういわれ、涼は苦笑しつつ立ち上がった。
「由弥は行かねぇの？」
「行くよ。挨拶ぐらいはちゃんとするよ」
そう言って由弥も立ち上がった。
玄関へ向かうと、背の高い男の姿が目に映った。
寄り添うように由布子の前に立った男の顔を見て、涼はさっきまでの楽しい気分が一気に吹き飛んだのを感じた。

「マジかよ……」
小さく呟いた涼に気づかず、由布子はフィアンセの男に涼を紹介した。
「夏木涼さん。由弥さんの初めてのお友達よ」
「やめてよ、姉さん」
由弥は先ほどの不機嫌な顔を押し隠しながら、拗ねたような声を出す。
だが涼はそんな由弥の声にも気づかず、男を見つめた目を離せないまま、ようやく掠れたような声を出した。
「は、始めまして」
「こちらこそ。私は志藤洋輔です。でも、驚いたな。由弥君にお友達とは」
その言葉に、由弥は不機嫌を隠さずに声を出した。
「どういう意味ですか。僕に友人が出来るのがそんなに驚くことですか」
不機嫌な声を出した由弥に、洋輔は弁解するような言葉をはいていたが、その言葉も涼の耳には入っていなかった。
涼はただ、洋輔と名乗る男を見つめていた。
似ている。似すぎている。あの人に……。
香田のお父さんに……。
由布子のフィアンセは香田の父にそっくりだった。この間見たときのような皺はないが、理知的な目許も、鼻の形や口の形何もかもが香田の父にそっくりなのだ。
あの自殺した、香田の父親に……。
「夏木君？　私の顔に何か付いているかな？」
聞かれて涼は我に返った。洋輔だけでなく、由布子や由弥までが不思議そうに自分を見ていた。
涼は慌てて取り繕うような笑顔を浮かべた。
「いえ、すみません。知り合いに似ていたもので、驚いて」
それだけ口にするのが精一杯だった。だが、それだけで洋輔たち

は納得したようだった。由布子がそろそろ行きましょうと洋輔を促し玄関を出るのにも声を掛けず、涼はただずっと自分の考えに没頭していた。

香田という名前を聞いてまさかとは思っていたが、本当に由香の父親が居ようとは……

つまりこういうことなのではないだろうか。由香の父親は、由布子と結婚して香田の性を名乗った。そして由香の父親、つまり洋輔は二千三年に俺と会った時に、俺のことを思い出した。

でも、だからといって自殺などするだろうか？　昔の知り合いに似ていると言って笑い飛ばせばいいだけの話じゃないか。

それとも、この後洋輔と俺たちの間に何か事件でも起こるのだろうか？

そう、由香の父は生前こういっていたではないか。お前ら復讐に来たのかと。

だったら話しは分かる。洋輔が俺か、由弥のどちらかに何かをした。そして三十年後に、涼が彼に復讐しに来たのだと、洋輔は思ったのだろう。

だが、今にこやかに笑っていた男が、自分達に何をするというのだろうか。全く想像が付かない。

頭の中がごちゃごちゃしてきた。訳の分からないことばかりだ。

「涼、どうしたんだ？　ぼーっとして」

由弥の声に涼は我に返った。考えに没頭しすぎていたらしい。困惑気な表情を見せる由弥に、涼は笑って見せた。

「何でもない。本当にさっきの人が知り合いに似てたから驚いただけ」

そう言うと、由弥はあっさり頷いた。

「なら、いいけど。妙に思いつめたような顔をしていたからビックリした」

涼は苦笑するしかない。まだ起こってもいないことをぐちゃぐちゃと考えていたのだ。全ては涼の憶測で、まるで見当はずれかもし

れないことを。
　二人は食堂へと戻った。由弥は食器を片付け、涼は朝食を取った。涼が朝食を食べ終わるのを見計らったように、由弥が声をかけてきた。
「涼、今日はどうする？　父さんは出張で留守だし、母さんもそれについて行ったから今日は俺たち二人きりだけど」
「え？　でも由布子さん帰ってくるだろう？」
　涼が言うと、由弥は面白くなさそうに口を開いた。
「帰ってこないよ。多分朝帰り」
「やる事はやるってか」
　涼がボソっと呟いた声は、由弥の耳には入らなかったらしい。今なんて？　と聞き返されて、涼は言葉を濁した。
「いや、何でもない。本当は、今日は映画見に行こうとしてたんだっけ？」
「ああ、でも、姉さんがチケット持ってるから見にいけない」
「あー、そうなのか？　じゃあ今日は家で大人しくしてるか。毎日のように出かけてるしな」
　涼が言うと、由弥は頷いた。
　毎日の様に出かけているといっても、近所を歩き回るだけだ。下手に行動して未来を変えてしまってもいけない。そんな風に由弥とは話ていた。
　涼は、与えられた部屋の掃除をすることにし、由弥は部屋で物書きを始めた。
　部屋の窓から漂ってくる味噌汁の匂いで、涼が空腹を覚え始めた頃、ようやく部屋の掃除が終わった。
　することのなくなった涼は空腹を抱え、隣の涼の部屋を覗いた。
　そこには机に向かって何かを書いている由弥の姿があった。机の脇には辞書が置かれている。
「由弥」
　涼が呼びかけると、由弥は振り向いた。

「何書いてるんだ？」
涼が聞くと、由弥は少し恥ずかしそうな顔をする。
「小説だよ」
「小説……、ああ、そういえばそんなこと言ってたっけ」
「今書いてるのはネタだけだけどね。こうやってネタをいくつも思いついたときに書いているんだ。出来上がったのは洋輔さんに読んで貰っている。彼、翻訳家で、自分でも小説を書いて発表しているからね」
「へえ。でも、何だかんだ言って、結局由弥も志藤さんに懐いてるんじゃないか」
涼が言うと、由弥は複雑な顔をした。
「懐いてる……と言うか。もともとあの人は僕の家庭教師だったからね。付き合いは姉さんより長いんじゃないかな」
「何だよ、もしかしてお前、志藤さんに嫉妬したわけじゃなくて、家庭教師を取られて、由布子さんに嫉妬してるんじゃないだろうな」
そう言うと、由弥は眉を寄せて、少し涼を睨んだ。
「まさか。変な事いうと怒るぞ」
本気の意図を汲んで、涼は苦笑いを返す。
「わるい、冗談」
「……まあいいけど」
由弥はそう言うと、開いていた辞書を閉じ、立ち上がった。
「昼食にしようか。って、言っても出前取るけど」
「おお、いいんじゃねえ？　そば食おうぜ、そば」
「いいよ。そばね。電話帳どこだったかな」
涼と由弥はそんな会話をしながら部屋を後にした。
出前で取ったそばは、思いの外美味しかった。満足した二人は暫く各自部屋に戻った。
涼はその後、二時間ほど昼寝をした。
ふと目を覚ますと、壁に掛けられた時計は午後四時を示していた。
起き上がった涼は強張った体をほぐしながら、由弥の部屋を覗い

た。
だが、由弥は居ない。
由弥を探して、涼は家の中を歩き回る。由弥は庭に出ていた。
庭の花壇や植木に水をやっていたのだ。
「由弥」
声を掛けると、由弥は涼を振り返った。そして、微笑んだ。
「涼、頬に畳みの後が付いてるよ」
そう言って、由弥は自分の右頬を指でさし示す。涼は頬を擦ってみた。確かにがたがたしている。
「本当だ」
二人して、笑いあう。涼と由弥は庭に面した廊下に腰を下ろした。
暫く二人して黙って庭を眺めていた。
すると庭の向こう、勝手口から一人の女性が顔をだした。
「美菜子」
由弥が声を出したので、涼はその女性と由弥を交互に見る。
「あら、お客様？」
由弥に、女性が声を掛けた。長い髪をした可愛らしい女性だった。その女性は涼に目を向けると、にこっと笑いかけてきた。涼もへらっとした笑いを返す。中々可愛い笑顔だ。結構涼の好みかもしれない。
「美菜子、紹介するよ。僕の友人の夏木涼くん」
「始めまして」
涼は意識して極上のスマイルを美菜子に向ける。
「こちらこそ。柴田美菜子です。由弥とは幼馴染なんです。それにしても由弥に男の友達がいたんですね」
「美菜子、余計なこと言わなくていいから」
「何よう、せっかく本返しに来たのに、もう返してやんないわよ」
美菜子が可愛らしく頬を膨らました。
「悪かったよ」
由弥は苦笑した。涼はこの二人を見比べて思った。何か妙に仲が

良くないか？　もしかして付き合ってるのかも。
　そんなことを思っている間に、美菜子は由弥に借りていたという本を返している。
「ねえ、他にお勧めの本あるって言ってたよね、それも貸して」
「分かった」
　由弥は庭から、家に上がると家の奥に入って行く。
　それを見送って、美菜子は涼に話しかけた。
「夏木さん、由弥とはどういう風に知り合ったんですか？」
「ああ、文通で」
　涼がいうと、美菜子はふーんと言う風に頷いた。余り信じてはいないようだ。
「そんなことより、君は由弥と付き合ってるの？」
　涼は気になっていたことを口にした。
「ええ？　まさか。そりゃ、由弥は私の初恋の人だったけど、はっきりとふられたもの」
「あ、そうなの？　悪いこと聞いたかな」
　そう言うと、美菜子はあっけらかんと笑う。
「別に、今は恋人いるし、はっきりと気持ちに整理はついてるから」
「それにしても、由弥はどうして君を振ったんだろう、美菜子さん可愛いのに」
　涼がいうと、美菜子は複雑な顔をする。
「それは、由弥に聞いて。私が口にすることじゃないと思うから」
　その言葉に涼は内心首を傾げる。その時、由弥が戻ってきた。
「美菜子、これ……どうかした？」
　由弥が涼と美菜子の間に流れている微妙な空気を察知したのかそう聞いてきた。
　美菜子はそんな由弥に笑顔を向けると、由弥の差し出した本を受け取った。
「何でもないの。ありがとう。じゃあ、私帰るから」
「え？　もう」

由弥の声に、美菜子は笑顔のまま言った。
「うん。これから夕飯の用意の手伝いしないといけないから」
「そう」
「また」
「ああ、また」
「夏木さんもまた」
「ああ」
美菜子は涼と由弥に手を振って、来た時と同様に勝手口から外へ出て行った。
「可愛い子だな」
涼がいうと、由弥が笑った。
「まあね、顔は。さて、そんなことより、夕飯どうしようか」
「俺が作ってもいいけど？」
涼が言うと、由弥は驚いた様に切れ長の目を見開く。
「ええ？　涼、料理作れるんだ」
「まあ。一人暮らしだったしな」
「へえ。でも、今日はどこかに食べに行こうか」
「俺の手料理食べたくないって？」
涼が意地悪くいうと、由弥は慌てたように首を振った。
「違う違う。久しぶりにドライブでもしようかと思ってさ」
「ドライブ？　お前免許持ってんの」
由弥は嬉しそうに頷く。
「もちろん」
「ちゃんと運転出来るのか」
思わず、思った事を口走っていた。どうにも、由弥が車を運転する姿が想像出来なかったからだ。
由弥はムッとしたような表情をして言った。
「失礼な。出来るよ」
「悪かった。怒るなよ、付き合うからさ」
そう言うと、由弥は少し表情を緩めた。

第五章　海辺にて

午後五時過ぎに家を出て、六時過ぎに目的のレストランに着く。そこで食事をとった後、由弥のまだドライブしたりないという言葉で、近場の海辺まで行くことにした。

午後八時近くに目的地に着いた二人は、車を路上に停め、砂浜に下りていった。

砂浜には彼ら以外に人の姿は無い。夏でもないのだから当たり前かもしれないが。

今日は晴れていたため、月明かりで街灯がなくてもそこそこ明るい。

涼は空を見上げた。星々が瞬き、綺麗な夜空だった。だが、春とは言っても、さすがに海風は冷たい。

「ちょっと寒いかもな」

涼が傍らにいる由弥に声を掛けた。

「そう？　僕はちょうどいい」

そう言って、由弥は砂浜に腰を下す。涼も一瞬躊躇したが、隣に腰を下した。

二人は暫く静かな暗い海を見つめていた。

最初に口を開いたのは涼だった。

「由弥、俺、お前に聞きたいことがあるんだけど」

「何？」

「なあ、どうして、お前美菜子さん振ったんだ？」

由弥は、驚いたように目を見開く。

「どうして、そんなこと……、ああ、美菜子か」

「美菜子さんはお前に聞けって言ってたぞ」

そう言うと、由弥は暫く黙った。涼も由弥が口を開くまで待っていたので、辺りは波の音だけが響いている。

「僕が昔、病気がちだったって前言ったよな」

由弥が静かに口を開いた。視線は下を向いている。手持ち無沙汰なのか由弥は指で砂浜の砂を持ち上げて、さらさらとその砂を落とした。
涼はそんな由弥を唯見つめていた。
「僕の病気って、心臓病なんだよね」
「心臓病？　でも、そんな風には全然……」
見えないと言おうとしたが、由弥の言葉に遮られた。
「ああ、一昨年手術してね、一応完治した」
涼はほっと胸を撫で下ろす。気づかない間に、身体が緊張していたようだ。驚いていた。まさかそんな大病だとは思っていなかった。
「でも、それと、美菜子さんとどういう関係があるんだ？」
涼の問いに、由弥は苦笑を返す。
「美菜子は僕に何ていったと思う？　あなたの子供が欲しいって言ったんだ」
涼は一瞬絶句した。美菜子の可愛らしい顔を思い出す。
「それは、また、大胆な」
涼の反応に、由弥は乾いた笑いを漏らす。
「はは、まあね。僕は美菜子に、結婚は出来ない、する気は無いって言ったんだ」
「何で？」
「いつ、再発するか分からないからだよ。それに俺の病気は遺伝するかもしれない」
あっと涼は声を漏らした。由弥は辛そうに眉を寄せた。
「それで、断ったのか……」
由弥は首を振った。
「それだけじゃない。僕には美菜子を友人以上には思えなかったっていうのもある」
そのつけたしたように言われた言葉が真実でないのではないかと、涼は思う。
だが、涼にはかける言葉が見つからなかった。両親に愛されて育

った由弥は辛い思いなんてしたことがないのではないか、なんて勝手に思いこんでいた。
黙ってしまった涼に、由弥はことさら明るく声を掛けた。
「ちょっと、涼。黙るなよ」
「悪い」
涼は謝った。由弥はまた苦笑する。
「なあ、僕も一つ聞きたい事があったんだけど」
突然聞かれて、涼は顔を向けた。一体何を俺に聞きたいと言うのだろう。そう思って、由弥の言葉を待っていると、由弥は口を開いた。
「涼がこっちへ来る時、鏡の向こうから声が聞こえたって言ったの覚えてるか？」
「あ、ああ。そういえば」
涼は頷いた。由弥は続ける。
「あの時涼は親父のいない世界に行きたいって言ってただろう？それが気になってた。どうしてなんだろうって思って」
ザザンと波が鳴った。涼は由弥の顔を凝視した。
「聞えてたのか」
由弥は決まり悪そうに頷く。
「そうか。俺も由弥に聞いたしな、話してもいいか」
涼は覚悟を決めた。今まで誰にも話していなかった心の内を口にしようと思った。
「俺、父親と仲が悪いんだ」
「うん」
静かに話し始めた涼に、由弥が相槌を打った。それに勇気付けられ、涼は続きを口にした。
「そうなったのは、俺の母親が俺と父を置いて、男と逃げた時からだったと思う」
「……駆け落ちしたってこと？」
はっきりと口にした由弥に、涼は頷く。

「そう、それからオヤジは俺に辛くあたるようになった。事あるごとにオヤジは、お前はあの女の子供だからって、俺を蔑んだ。暴力も振るわれた。俺は母親似だったし、オヤジはムカついてたんだと思う」
「だからって、息子にそんなこと……」
由弥はそう言って口をつぐんだ。かける言葉が見つからないとでも言うように。
きっと由弥は思ってもいなかったのだろう。世の中に子供を嫌う親がいるなんてことを。
由弥の両親はとても優しい。
「あの時もさ、オヤジと遣り合って、それで、オヤジから逃げたい、親父のいない世界に行きたいって思ったんだ」
「それを、僕が耳にしたわけだ」
「ああ。そうだな」
遠くの車道に車が通った音がかすかに聞こえた。車のヘッドライトの明かりだろうか、それが一瞬こちらに届き、すぐに通り過ぎた。
「辛かったんだな、涼も」
涼はその言葉に目を見張った。由弥のその言葉が今まで辛く張り詰めていた心にしみこんだ。分かってもらえた。そう思った。だから涼も由弥にこう返した。
「お前もな」
由弥はふっと笑った。次いで座ったまま伸びをする。
「あー、ゴメン。話しが暗くなっちゃったな」
そう言って、由弥はいきなり、砂浜に寝転がった。
「おい、由弥、砂付くぞ」
涼の声に、由弥は答えた。
「いいよ、別に。付いたって」
そう言って起き上がらない由弥に、涼は呆れてため息を吐いた。
いつの間にか由弥は目を瞑っている。
涼は少し由弥に近づいた。波の音が絶え間なく涼の鼓膜を打つ。

それ以外はとても静かだ。
近くには人もいない。彼らを見ているのは夜空に瞬く月と星々だけ。
「おい、由弥。寝てるんじゃないだろうな。風邪引くぞ」
声を掛けたが、返事が無い。返ってくるのは規則正しい呼吸音だけ。
涼は訝しみ、由弥のそばまで這って行く。
そして由弥の顔を覗きこんだ。
どうやら、本気で眠りこんでいるらしい。疲れていたのだろうか。
涼が覗き込んだため、由弥の顔に影がかかる。涼は暫く無防備な由弥の寝顔を見つめていた。
初めて会ったときも思ったけど、本当に綺麗な顔だよな。
涼はそう思う。
睫毛長いな。
しげしげと涼は由弥の顔を見つめていた。不意に、涼は由弥の顔に触れたくなった。
涼は砂地に付いていた手を放して、服で掌に付いた砂を落とすと、そっと由弥の頬に手をあてた。
思ったよりも暖かいぬくもりが手の平に伝わって、涼はなぜか鼓動が早くなるのを感じる。
そして次の瞬間。
涼は自分で、思っても見なかった行動をとった。
由弥の近くに寄せていた顔をそのまま下ろし、由弥の唇に自分の唇を押し当てた。
涼が我に返ったのは、由弥の唇が少し震えたから。
涼は慌てて、唇を離して、瞑っていた目をあけた。
その時、涼は身体を起こした由弥と目があった。
由弥は驚いた顔を涼に向けていた。それはそうだろう。驚くに決まっている。
だが、涼もそうとう驚いていた。自分の行動に。

「ビックリした」
涼はそう呟いていた。
それを聞きつけたのか、由弥も口を開く。
「それはこっちの台詞だよ」
「ああ、そうか。悪い」
涼が謝ると、暫く沈黙が二人の間に流れる。
「なあ、二十一世紀では、友達どうしてこういうことするの？」
由弥がそう聞いてくる。
「まさか」
つい、涼は正直に答えてしまった。そうだと肯定していれば、由弥は納得したかも知れないのに。
後悔しても後の祭りだ。由弥は訝しげな表情を作っている。
「じゃあ、何で？」
つっこまれたくなかったのに、由弥はそう聞いてきた。なんと答えるべきだろう？　自分でもどうしてこういうことをしたのか分からないのに。
言葉を捜して黙っていると、由弥の溜息が聞えた。
顔を由弥に向けると、由弥は苦笑したような笑顔を作る。
「まあ、いいや。帰ろうか。そろそろ本気で寒くなってきた。風邪ひきそう」
そう言って立ち上がる。
涼はそんな由弥を座ったまま見上げた。
由弥は涼を見下ろし、手を涼に差し出した。
「帰らないの？」
「いや、帰る」
涼は由弥の差し出した手を取ると立ち上がった。そして由弥の髪や背についていた砂を払ってやる。
由弥に礼を言われて、涼は複雑な気持ちになった。
どうやら、由弥はさっきのことをなかったことにしてくれるらしい。それはとてもありがたかった。

歩き出した由弥の背中を見つめ、涼は安堵の息を吐いた。
そしてゆっくりと、由弥の背中を追った。
そんな二人を月は静かに照らしていた。

第六章　気まずい二人

昨日と変わらず空は晴れていた。だがどうにも涼の心は晴れない。
由香の父親にそっくりな、由布子のフィアンセのことも気にはなった。だが涼の心を占めているのは昨日自分がとった行動について。
なんであんなことしちゃたんだろうな。
後悔が頭の中をグルグルと巡る。由弥は気にしていないようだったが、涼はダメだった。由弥と顔を合わせ辛い。
だから今もあてがわれた部屋で寝転がっていた。由弥と顔をあわせたのは朝食を取ったときだけ。
由布子は昨日由弥が言ったとおり、何処かへ泊まったらしい。まだ家に帰っていなかった。
二人きりの朝食は気まずくて仕方がなかった。
涼は殆ど由弥と目を合わせることなく、まだ眠いからと部屋へ戻った。
このままではいけない。気にしているのは涼だけで、由弥は全く気にしたそぶりも見せていないではないか。
それに、考えなければならないのは、このことではなく、由布子のフィアンセの事のはずだ。
そこまで考えて、涼は寝返りを打った。
「ただいまー」
涼の耳に微かに届いた声は、由布子のものだった。
今頃帰ってきたらしい。時刻は午前十一時を回っている。
「由弥さん。夏木さん。いないの？」
また由布子の声が聞こえ、涼は起き上がった。ここで彼女を出迎えないのも悪いと思ったのだ。
涼が部屋を出ると、ちょうど由弥も部屋を出てきたところだった。
「な？　朝帰りだっただろう」
目が合うと、由弥は笑って言った。涼はその笑顔にドキリとする。

「そ、そうだな」
そう言った涼を由弥は一瞬不審そうに見て、廊下を歩き出す。涼もその後を付いていく。
居間まで来ると、涼は由布子とそのフィアンセがいた。
「お帰り姉さん」
由弥が由布子に言って、由布子は照れたような笑顔を見せる。
「ただいま。洋輔さん連れてきちゃった」
由布子がそう言って、傍らに立っていた洋輔の腕を掴む。
洋輔は人の良い笑みを浮かべ、由弥と涼を見る。
「お邪魔します」
涼は洋輔の言葉に頭を下げる。どうしてだろう。どうしてもこの男の笑顔を胡散臭く感じてしまう。涼に偏見があるからだろうか。
「姉さん、父さんと母さん、出張長引くって電話があった。後二週間は海外だって」
「まあ、そうなの？」
由弥は洋輔には目もくれず、由布子をみてそう告げた。
その様子に、涼は少し不審に思った。だが、それ以上に、由弥の言葉に驚いた。
「えー、それじゃあ、俺が帰る前に会えないのか」
一緒にいたのは二日くらいだが、お世話になった分も涼はお礼を言いたかったのだ。
涼の大声に、由弥は顔を顰めた。
「何？　朝も言ったけど。涼殆ど、上の空だったもんな」
「ああ、ゴメン」
涼は素直に謝った。由弥は別にいいけどと言って、また由布子に視線を戻した。
「で、姉さん。昨日はどこに行ってたの？」
「ええ？　色々よ。ねぇ、洋輔さん」
「ああ、そうだね。由布子」
洋輔は由布子の顔を見て微笑んでいる。こうやって見ると、やっ

ぱり普通の男だ。恋をした普通の男。俺や由弥に何かするっていうのも、思い違いかも知れない。そうであってくれたらいいのに、と涼は思う。

でも、俺はこの人の最後を知っているんだと、ふとそう思って涼は嫌な気分を覚えた。

「由布子、腹減ったな。何か作ってくれる？」

洋輔が由布子に耳を近づけ、囁く声が聞こえる。由布子はそれに嬉しそうに笑って答えた。

「はいはい。いいわよ。何食べたい？」

由布子の問いに、洋輔は笑顔で答えた。

「君の作ったものなら何でも」

よくもまあ、気障な台詞が言えるものだ。と、涼は思う。このラブラブな二人を見ていられなくて、逸らした視線が由弥とぶつかる。

「俺たちお邪魔かな」

涼の言葉に、由弥は頷いた。

「姉さん。僕たち近くの食堂へ行くから俺たちの分はいいよ」

由弥がそう言った。姉が男といちゃつくのを見ていられないのだろう。だが、由布子は由弥の気持ちに全く気づいていないようだ。

「どうして？　私が作る料理が気に入らないわけ？」

「違うよ、姉さん」

「まあまあ、由布子。由弥君は気を利かせてくれたんだよ。なあ、由弥君」

洋輔がそう言って、由弥に同意を求める。由弥は洋輔から思わずと言う風に顔を背けた。

心なしか顔が青ざめている様に見えるのは気のせいだろうか。

「涼、行こう」

結局由弥は洋輔に返事を返さず、涼の腕をひっぱって玄関の方向へ歩き出す。

「あ、え？　あの、行って来ます」

戸惑いながらも、何とか呆気に取られたような顔をしている由布

子たちに言った。
そのまま引きずられるように、涼は玄関まで来た。
「おい、由弥。どうしたんだよ」
涼の声に、我に返ったのか、由弥は涼の腕を離した。
「ゴメン」
謝って涼の顔から目を逸らす。
「いや、別に謝らなくてもいいけど、やっぱ嫌なもん？　大好きなお姉さんが男といちゃついてるの」
「別に、いいだろそんなこと。行こう。食堂」
「あ？　ああ」
涼は由弥の後について玄関を出る。由布子たちの出現で、涼の由弥に対する気まずさが消えたことに気づくのは少し後だった。

近くの大滝食堂で昼食をとった後、涼たちは暫くぶらぶらと散歩していた。そろそろ帰ろうかと家の方向へ足を向けたとき、後ろから二人に声がかけられた。
「由弥、夏木さん」
二人が振り返った先にいたのは、美菜子だった。今日は淡いピンク色のシャツに白いスカートをはいている。長い髪は前とおなじようにポニーテールにしていた。
「男二人でデート？　仲が良いのね」
二人の前に走り寄ってきた美菜子は開口一番にそう言った。涼は面食らう。昨日の今日でそんなこと言われたら焦ってしまう。いや、焦る必要なんて無いのかも知れないが。
「美菜子、冗談言うな。涼に失礼だろう」
焦っている涼に気づいているのか、いないのか。由弥は美菜子にそう言った。美菜子は素直にゴメンなさいと謝る。
どうしてこんなところにいるのかと聞かれ、涼たちは今由布子のフィアンセが家に来ていて居づらいのだと語った。
「はー、そうなの。じゃあ、家に来る？　今誰も居なくて暇だった

のよ。彼も今日は仕事だしね」
そう言ってにっこり微笑まれて、涼も由弥も彼女の言葉に甘えることにした。
美菜子の家は由弥の家の二件先だった。こちらは本格的な日本家屋で、洋室は無いのだそうだ。
「私は洋室憧れるんだけどね。かわいいじゃない？」
美菜子はそう言って笑った。
出されたお茶を飲みながら、三人は他愛も無い話で盛り上がる。
暫くして由弥がお手洗いといって部屋を出て行く。
涼は手持ち無沙汰を覚え、残り少なくなった茶を啜った。
「ねぇ、夏木さん。由弥と何かあった？」
疑わしそうな美菜子の目と視線がぶつかった。驚いた。彼女はかなり鋭い。だが、ここで認めるわけにもいかない。
「別に何もないけど？」
そう答えると、涼はぎこちなく笑みを口元に乗せた。
「ふーん。そう。ところで、聞いた？　由弥が私を振った理由」
信じていない顔だったが、彼女はこれ以上聞き出せないと思ったのか、話を変えた。
涼は頷いた。美菜子はそう、といって目を伏せた。
「可愛そうでしょ？　由弥」
「え？　ああ、かわいそうって言えばそうかな」
「だったら、慰めてやってね。由弥を」
「？」
美菜子が何を言いたいのか分らず、涼は美菜子を見た。美菜子は真面目な顔で、涼を見つめてくる。
「夏木さんって、カッコいいし、由弥とはお似合いじゃないかと勝手に思ってるんだけど。見掛けより優しそうだし。由弥もずっと一人じゃかわいそうだし」
何を言い出すんだ。と涼は美菜子の考えが読めない。美菜子は苦しそうに少し笑った。

「だって、由弥は、子供が出来ることを恐れてる。だったら、絶対に子供が出来ない人と付き合えればいいと思ったの。それがあなたなら、私も認められるかなと思って」
涼は呆れて美菜子を見た。物凄いことを考えるな、と思う。こんな可愛い顔して、男同士で付き合えなんて……。
「それとも、夏木さんは由弥の事嫌い？　どうしても、由弥のことそんな風に見れない？」
涼の沈黙をなんと思ったのか、美菜子は涼に身を乗り出して聞いてくる。涼は戸惑った。俺は由弥のことをどう考えているのだろう？　気の合う奴だとは思っていた。今まで付き合ってきた友人の誰よりも、会ってそんなに期間は経っていないのに、まるで昔からの親友のような気がしていた。
でも、昨日。俺はあいつの唇に触れた。今でも何故自分がそんなことをしてしまったのか分からない。
家の奥で、ドアが閉まる音を聞いた。由弥がトイレから出てきたのだろう。
涼は思考を中断して、まだ身を乗り出して、涼の答えを待っている美菜子に言った。
「あのさ、まず、由弥の気持ちがあって初めて成り立つ話だろう」
涼の言葉に美菜子はあっと声を上げた。
「本当だわ。忘れてた。私ってば自分の考えが一番正しいと思っちゃうところがあるから、そんなことちっとも考えてなかったわ」
そう言って、美菜子はからからと笑い出した。つられて涼も笑う。そこに襖を開けて由弥が入ってきた。
「何？　楽しそうに笑って。何の話？」
由弥の問いに、美菜子は笑いながら答えようとする。涼は慌てて、そんな美菜子を遮った。
「いや、別に。お前が遅いから、大のほうかなって言ってた所」
つい下品な言葉を口走った涼に、由弥は不快な顔を向けてくる。
「違うよ、バカ」

咄嗟に付いた嘘が可笑しかったのか、美菜子は本格的に笑い出してしまった。
「ちょっと、美菜子、何がそんなに可笑しいんだよ」
由弥が不機嫌な声を出したが、美菜子の笑いは止まらない。そんな美菜子を見ているうちに、涼も由弥も何だか笑いたくなって笑った。
そしてそれは暫く続いた。

第七章　賞をとった小説

美菜子の家を出たのは午後六時二分前だった。結局あの後、美菜子の話を由弥には聞かせなかった。

取り留めの無い話ばかりしていた気がする。

家に着くと案の定洋輔はまだいた。

「お帰り。遅かったじゃないの。どこへ行ってたの」

由布子が怒った顔で彼らを迎えた。涼はスイマセンと誤り、由弥は美菜子の所へ行っていたと言った。

「それならそうと、連絡くれればいいのに。由弥さんがまた倒れたんじゃないかと心配したじゃない」

その言葉に、由弥は声を荒げた。

「僕はもう、完治したよ」

涼は驚いて由弥を見る。由弥が怒鳴ったところなんて初めてみた。だが当の由弥はしまったと言う風に顔を顰め、声を落として姉を見る。

「ゴメン姉さん……」

「謝ることなんてないのよ。ごめんなさい。姉さんこそ、子ども扱いして……」

気まずい雰囲気が漂いだす。涼はどうしたものかと二人を見比べた。

「由布子？　鍋が噴いているよ。お帰り、由弥君、夏木君」

あら大変と、由布子は台所へ走って行く。入れ替わりに現れた声の主は見なくてもわかる。洋輔だ。

「二人とも早く上がったらどうだい？　今日はご馳走だよ」

「ああ、そうですね。でも、なんでご馳走なんですか？」

由弥が答えないので涼がそう言うと、洋輔は一度由弥を見て、口を開いた。

「それは、後で。食事の時にでも話すよ」

そう言ってどこが含みのある笑顔で、涼ではなく由弥を見る。由弥はすぐにそんな洋輔の視線を避けるように顔を逸らした。
前から思っていたが、由弥は洋輔を避けているようだ。何故だろう？　もしかすると洋輔は由弥に恨まれるようなことをすでにしているのだろうか？
だがそんな疑問を深く考える前に、台所から由布子の呼ぶ声が聞こえた。
「みんなーご飯よー」
洋輔は、はーいと由布子の声に答えて、台所へ向かって歩き出す。涼もその後を追うように歩き出した。だが、由弥がまだ玄関につっ立ったままなのに気づき振り返る。
「由弥？」
名前を呼ぶとはっとしたように、由弥は顔を上げた。
「ああ、ゴメン何でもない」
そう言って、由弥は靴を脱いで上がってきた。二人はそのまま居間へと入って行った。

天ぷらが山盛りになった大皿が、食卓の真ん中に置かれている。それ以外にもかぼちゃの煮つけやほうれん草の胡麻和えなどが並んでいた。
四人はまだ熱々のそれらを暫くは無言で食べていた。
そのうち由布子が話しだし、それに洋輔が答える。途中で涼も会話に加わり、場が盛り上がっていく。
「でもどうして、今日はご馳走何ですか？」
涼がさっき聞いて返事をもらえなかった質問をもう一度口にする。
今度はそれに由布子が嬉しそうに答えた。
「実はね。洋輔さんの小説が賞をもらえることになったのよ」
「本当？　志藤さん」
心底驚いた様に、声を上げたのは由弥だった。その由弥に視線を合わせ、洋輔は言った。

「ああ、君のお蔭でね」
洋輔はゆっくりと微笑んだ。どこか含みのあるその笑顔。
「……」
じっと洋輔に見つめられ、由弥は言葉を失った様に黙り込んだ。
「ねえ、洋輔さん。由弥さんのお蔭ってどういう意味？」
由布子が屈託なく洋輔に尋ねる。洋輔は笑顔で由布子に視線を動かした。
「まあ、色々。彼にもアドバイスを貰っていたからね」
「そうなの？　由弥さん。私全然知らなかったわ」
由布子が由弥に視線を向けた。由弥は引きつったような笑顔を作った。
「まあ、そうかな……」
「ねえ、志藤さん。志藤さんって翻訳家だって聞いてたんだけど」
涼が口を開いた。話を変えたかったのだ。由弥が辛そうな顔をしていたから。
「ああ、そうなんだ。だけど、他人の話を訳すだけなのはつまらなくてね。自分でも書いてみたくなったんだ」
「へえ。それで賞が取れるってのは、やっぱ才能なのかな」
涼の言葉に反応したのは、洋輔ではなく由布子だった。
「そうでしょう。そうなのよ。すごいのよ」
手放しで褒め始めた由布子の言葉を途中で遮ったのは、由弥の立ち上がった音だった。
涼たち三人の目が由弥を見上げた。
「ご馳走様。部屋に戻るよ」
「おい、由弥」
「由弥さん、まだそんなに食べてないじゃないの」
由布子が眉を寄せて、非難の言葉を由弥に吐く。
「お腹空いて無いんだ」
そう言ってリビングを出て行ってしまう。
涼はそんな由弥が気にかかり、行儀悪いとは思ったがご飯を思い

っきりかきこんで飲み下した。
「ご馳走様です。俺も部屋に戻ります」
そう言って何か言われる前にさっさと立ち上がって部屋を出た。
そのまま由弥の部屋のドアの前に立つと、ノックする。
返事が返る前にドアを開けた。
「由弥、どうしたんだよ急に」
由弥は机に向って座っていた。涼に背を向けた格好になる。だから由弥の表情は見えない。
部屋には明かりがついていない。この部屋の光源は窓から覗く月明かりだけ。
「何でもない」
由弥は涼に背を向けたまま言った。
「でも……」
「何でもないから出ていってくれ」
由弥は立ち上がってそう怒鳴った。振り向いた顔が痛みに歪んでいる様に見える。
「そんな風には見えない」
静かな涼の言葉に、由弥は聞きかえす。
「え？」
「何にも無いようには全然見えないっつったの」
半ば怒鳴る様に涼は言った。由弥は驚いた様に目を見開いた。涼を凝視する。涼もそんな由弥を見返した。
これは根競べだと涼は思った。何故由弥が怒っているのか。何故由弥は辛そうに顔をゆがめているのか。
涼には分からない。
知りたいと思っていた。
だから目を逸らさない。
逸らさない。
リビングの方から由布子のはしゃいだ笑い声が小さく聞えて来た。
この様子なら、さっきの由弥の怒鳴り声に気づいてはいないのだ

ろう。
視線を先に逸らしたのは由弥だった。由弥は顔を横向けた。そんな由弥に涼は話し掛ける。出来るだけ穏やかに聞えるように抑えた声音で。
「どうしたんだ？」
「……」
「話してくれなきゃ分からない」
涼は顔を背け続ける由弥に近づいた。手を出せばすぐに触れられるほどに。
「由弥、なあ……」
「……」
涼は由弥の頬に両手で触れて、顔をこちらに向かせた。
「お前が情緒不安定なのってさ。あの志藤洋輔が原因？」
涼の言葉は確信をついたようだった。涼の掌に包まれた由弥の顔が、そう物語っていた。
「あいつとお前の間で何かあったのか」
つい声を荒げてそう聞いていた。由香の父親の顔が浮かんで、志藤洋輔の顔と重なった。
あいつは俺に復讐されると恐れていた。あいつは、志藤洋輔は既に、由弥に何かしているのかも知れない。
由弥はそれに傷ついているのだろうか。
何もかも憶測でしかない。今目の前にいる由弥は何も話そうとしないのだから。
由弥の瞳から、一筋の涙がこぼれた。
それを目にして、涼は我に返った。
「由弥？」
声を掛けた。由弥は涼の眼差しから逃れるように、目を伏せた。
「話せない……、話したくない。涼には知られたくない。絶対に……、知られたくない」
最初は小さい声で発された言葉は、だんだんと大きな悲鳴のよう

な声に変わった。
涼は思わずそんな由弥を抱きしめていた。
由弥の頭に右手を添えて、由弥の顔を肩口に押し付けた。
由弥は本格的に泣き出した。荒々しい泣き声は上げなかった。声を殺して、すすり泣いていた。
涼はそんな由弥をより一層強い力で抱きしめた。
それくらいしか、自分に出来ることはなかった。ただ、俺はお前のそばにいるよ。そう教えてやりたかった。
涼は由弥が泣き止むまでの長い時間、ずっと由弥を抱きしめ続けた。

第八章　真相

目が覚めると、涼の顔が間近にあって由弥は驚いた。
片手を付いて起き上がり、思い出した。
きのう僕は泣いたんだっけ。
由弥は額に手を当てた。
ふと動かした足に、何かが触れた。それに視線を落とすと、そこには見覚えのあるタオルケットがあった。自分の身体にかけられていたのだろう。
これは物入れに仕舞っていたはずだ。涼がかけてくれたのだろうか。
多分そうだろう。いつも何故か不機嫌そうな顔をしているが、彼が優しいことはもう分かっていた。笑うと愛嬌がある顔も由弥は好きだった。
会った当初、由弥は涼に何故いつも不機嫌そうな顔をしているのかと聞いたことがあった。その時涼はこれが地顔なのだといった。別に不機嫌でもなんでもないんだと。
涼の寝顔をみながらそんなことを思い出した。
昨日は、泣くつもりなんてなかった。確かにアイツがいることで、イライラしていた。姉さんを好きでも無いくせに、姉さんの心を独り占めにしているアイツの存在で。あんな奴、姉さんと付き合う資格など無いのに。
アイツが僕にしたことを姉さんに打ち明けてやろうと思ったことは何度となくある。
でもそのたびに、姉さんの笑顔が曇るのを想像してしまい、出来なかった。
姉さんはアイツを本気で愛しているのだ。自分ではなくあんな非道な男を。
「んっ」

涼が小さく呻いた。由弥ははっと涼に視線を送る。
「涼？」
涼の瞼が震えて、うっすらと目が開いた。
「あれ？　由弥」
「うん、おはよう」
自分でも驚くほどすんなり笑顔が顔に浮かんだ。
涼もまだ眠気の抜けない顔に笑顔を乗せる。やっぱりこの笑顔は好きだなと由弥は思う。幸せになる笑顔だ。
「おはよう、由弥。イライラはもう収まったみたいだな」
出し抜けにそういわれ、由弥は少し戸惑った。その間に涼は起き上がり、机を背もたれ代わりにして座った。由弥は口を開いた。
「恥ずかしいな。三十も年下の人に心配かけてるんだよな。悪かった。それとありがとう」
「何言ってんだよ。今は同じ年だろう。変なこと気にすんなよ。それに礼を言われるようなことしてない」
「でも、肩かしてくれただろう？」
「まあ、そうだけど」
「これもかけてくれたし」
そう言って由弥は足元に落ちていたタオルケットを掴んで軽く持ち上げた。
「ああ、それ、押入れに入っていたのを勝手に引っ張り出したんだけど、よかったか？」
「悪いわけ無いじゃないか」
「だったらいいけど」
そのあと少し沈黙があった。昨日月が覗いていた窓から、今は朝の光が存分に部屋に入ってくる。
開いた窓からは通りを行く車の音が聞えてきた。
鳥の声も聞こえる。すずめかな？　と由弥は思う。何処からか良い匂いが漂ってきた。味噌汁と、焼き魚だろうか。
「何か腹へった」

唐突に涼が言った。由弥はそんな涼を見る。そして笑った。
「僕もそう思ってたとこ」
そして今度は二人して目を合わせて笑った。
その時思った。
僕はもう一人じゃないんだ。孤独に悩まなくたって良い。こうやって同じ思いを共有できる人に出会えた。たとえそれがもうすぐ離れなければならない相手だとしても。それでもきっと前ほどの孤独を感じなくて済むだろう。
目の前にいるこの人に、恥じないように生きなければ。そんな風に思える。
だから決めた。今日、アイツと向き合うことにする。逃げてばかりの自分にさよならを告げるために。

どうやら洋輔は昨日この家に泊まっていたようだ。
当たり前の様に、由布子に朝食を作らせ、当たり前の様に食卓の前に座っていた。
そして笑顔で由弥におはようといった。
本当は挨拶など返したくはなかった。だが、ここには姉も、涼もいる。変に思われたくなかった。だから挨拶を返して、同じ食卓についたのだ。
由布子は朝食の席で、洋輔が賞を取ったという小説本を出してきた。
それは由弥が想像していた通りの題名だった。
ペンネームは夏木涼。涼の名と同じ字を書く。名前の読みがリョウとスズムの違いだけ。
「あれ？　このペンネーム……」
「知ってるかい？」
訝しむような声音で呟いた涼の言葉に、洋輔がそう返した。由弥は二人に目をやった。
「ああ、まあ、知ってるっつーか」

そう言って涼は由弥を見た。目が合う。
そういえば、涼には自分のペンネームが夏木涼だと言ったことがある。初めて涼と会った日に。嬉しくてついそう口走っていた。
「俺の名前と同じ字だからちょっとビックリしたんです」
涼はすぐに目を由弥から逸らしてそう言った。
「まあ。そうなの？　夏木さんて洋輔さんのペンネームと同じ字を書くの？」
心底驚いたというように、箸を持った手を止めて、由布子が涼に聞き返している。
「はい。僕も驚きましたよ」
そう言って涼は由布子ではなく、由弥にまた視線を送る。由弥は目を逸らした。
何か感づいているのかも知れないと、由弥は思った。涼は何か感づいている。彼はとても鋭いところがあるから……。
「どうかしたの？　由弥さん。あなた昨日からおかしいわよ」
思考に突入していた由弥に由布子がいきなり声を掛けてきた。
気が付くと、涼や洋輔までが由弥を見ていた。
「な、何でもないよ。ちょっと疲れているだけ。涼が来てからはしゃぎすぎたのかも」
その答えに、由布子は噴出した。涼は変な顔をし、洋輔は口元だけで笑っていた。
「由弥君は夏木君のこと本当に好きなんだな」
穏やかな声音で洋輔が由弥に言った。由弥は洋輔を驚いて見る。
そして軽く息を飲んだ。洋輔の口元は笑っているのに、目は笑っていなかった。鋭い眼光が由弥を射る。その時、涼が抗議の声を洋輔に上げた。
「変な風に言わないでくださいよ。志藤さん。今のじゃ俺と由弥、倒錯入っているみたいじゃないですか」
「本当。ちょっと私もそう思っちゃった」
由布子が言って笑った。

「そうか？　俺は思ったままを言っただけだよ、なあ、由弥君」
「……そうですね」
「ご馳走様です」
由弥の小さな返事をかき消すほどの大声で、涼がそう言った。驚いて由弥が涼を見ると、涼は由弥にだけ分かるように、にっと笑った。
見ると確かに涼の前にある皿は見事に空になっている。
「由弥。早くお前も食えよ。今日も美菜子ちゃんのところ行くんだろう」
そんな話しはした覚えはなかったが、由弥は涼の言うとおりに、急いで食事を終えた。
早くこの場から去りたくてしょうがなかったのも事実なのだ。
食事を終え、慌てて出て行こうとする由弥と涼に、由布子が声を掛けた。
「ああ、ねえ、今日から私出かけるから」
「え？　何で」
由布子の声に由弥は振り返って問うた。
「今日から、高校の時の友達と一泊二日で旅行へ行くって言ったでしょう」
そういえば涼が来る前にそんな話しを聞いたことがあるような気もする。
「そうだったっけ」
「そうなのよ。だからその間はどこかで食べてくるか、店屋物を取るかして頂戴ね」
「分かったよ。姉さん」
由弥は姉に頷いて見せた。由布子も頷き返して、由弥から涼に目を転じる。
「夏木さん。由弥さんを頼みます」
「はい。任せてください」
「ちょっと、姉さん。どうして涼に僕を頼むんだよ」

少しムッとして由弥は言った。まるで子ども扱いだ。涼は本当なら自分より三十も年下なのに。
「俺の方が、しっかりしてるからだろう。ね、由布子さん」
しゃあしゃあと、涼はそう言ってのけた。今度ははっきりと由弥はムッとした表情をした。
そんな由弥に、由布子は言った。
「由弥さん。本当のこと言われて、怒るのはみっともないわよ」
その言葉に、涼と洋輔が笑い出した。
由布子もそれを見て笑う。由弥は笑う気になれず、そんな三人に背を向けて、さっさと部屋を出て行った。
慌てたように涼が由弥の名を呼んでいるのが背後から聞える。
由弥は立ち止まって涼が傍らに来るのを待つ。そして二人で家を出た。すぐにどこからか金木犀の匂いが漂ってきた。いい匂いだ。空は青空。気持ちのいい日だった。由弥は美菜子の家の方角に足を進めた。
「これから、どうする」
突然、涼が由弥に聞いた。由弥は訝しげな表情を作った。
「え？　さっき美菜子の家に行くって言わなかったか」
「ああ、あれ嘘。昨日美菜子ちゃん、明日は彼氏とデートって言ってただろう」
忘れたのか？　と聞かれて、由弥は思い出した。そういえばそんなことを言っていた気がする。
「じゃあ、何でさっき」
由弥が問いかけると、涼は指先で頬を掻きながら答える。
「だって、由弥あそこから早く出たそうな顔してたし……」
良く見てるなと、由弥は思った。どうして涼はこんなに何でも分かるのだろう。
由弥に父親の話をしてくれた時、自分は弱い人間だといっていた。だが、由弥には涼が弱い人間だとは思えなかった。自分よりもはるかに強い、とても強い人間に見えた。

「なんだよ、じっと見て」
由弥が涼を凝視していることに気づいたのだろう。涼はそう聞いてきた。由弥はすぐに目を逸らした。
「何でも、無いよ」
「そう？　ならいいけど。行くところもないし、暫く散歩でもしようか」
涼の提案に由弥は頷いて答えた。
会話は余りなく、二人は並んで歩いた。
由弥はたまに涼を盗み見た。
僕は彼の様に強くなれるだろうか。もう逃げたくなかった。決着をつけなければならないと思っていた。
そしてそれは今日しかないとも。
姉が留守をする今日しかないと……

深夜一時。
姉は予告通り家には帰ってこなかった。涼も部屋で眠っているのを確認した。由弥は今、父の書斎にいる。ここが一番涼のいる部屋から遠い部屋だったからだ。
そして由弥の目の前に、由弥が憎んでいるといっていい相手がいた。今は本棚の影で相手のシルエットしか見えないが。
「こんな時間に呼び出して、どうしたんだ？　由弥」
低い声が由弥を呼んだ。そう、由弥が彼を呼び出したのだ。姉にも涼にも聞かれたくない話があったから。
部屋には電気もつけてはいない。この薄暗い部屋では、大きな窓から入る月明かりだけがたよりだ。だが、それでいいのだ。相手の顔をはっきり見ることが出来たら、自分はすくんで話など出来ないと思ったから。
「話とは何だ？　俺も暇じゃないんでね。用が無いなら失礼するよ」

そう言って動き出そうとした相手に、由弥は待ったをかけた。
「待てよ」
「何だ？　由弥。お前震えてるんじゃないか？」
あざ笑うかのように低い声で言われた。
「それとも、前みたいに抱いて欲しいのか？」
そう言って一歩踏み出した大きなシルエットは、本棚の影を出て、月明かりの下に姿を晒す。志藤洋輔は笑っていた。ひどく酷薄に。
「ふざけるな。……近寄るなっ」
由弥はつい、大声を上げていた。怖かった。あの時の恐怖が今になって思い出された。身体が震える。でも、言わなければならない。この男から開放されるために。
「僕は、もう、あんたの言いなりにはならない」
「何を言っているんだ？　由弥」
「あんたのゴーストライターなんてもう真っ平だ」
「おい、由弥」
怒気を含んだ声音と共に、頬が鳴った。殴られたのだと自覚したのは、殴られた反動で床に手を付いてから。
「いきなり、どうしたって言うんだ」
床についていた両手を、洋輔につかまれた。
手首を痛いほど締め付けられて、由弥は顔を苦痛に歪めた。
「い、痛い……」
「聞いてるんだよ、由弥」
「嫌になっただけ……だっ、あんたの言いなりになることに嫌気が差したんだ……」
「ふざけるなよ、由弥。お前、俺から逃れられるとでも思っているのか？」
耳元で冷たい声音で言われて、鳥肌が立つ。
由弥はつかまれている両手を動かして苦痛から逃れようともがいた。
だが力の差は歴然としていた。由弥の両手は床に縫いとめられる

様に、きつく抑えられている。
「それとも、最愛の姉さんを悲しみのどん底に突き落としたいか？」
由弥は目を見張った。姉の幸せそうな顔が頭に浮かんだ。
二年前、この男に乱暴されたときもそう言って脅されたのだと思い出した。だが、これ以上、洋輔の言いなりになるのも、姉を騙し続けるのも嫌だった。だから言った。
「あんたみたいな男と結婚するよりはましだよ」
睨み付けて言った瞬間もう一度頬がなった。痛みを感じる前に、身体を床に押し付けられた。
洋輔に組み伏せられた格好になった由弥は、二年前の情景を思い出して、吐き気がこみ上げてきた。
「俺たちは今まで上手くやってきただろう？　由弥。何故急にそんなこと言い出したんだ」
洋輔は由弥に顔を近づけ、言った。その顔は怒りに歪んでいる。
「……」
「アイツの影響か？」
由弥が黙っていると、洋輔はいきなりそう言った。意味が掴めず、こんな状況にも関わらず、聞き返していた。
「え？」
「アイツだろう、夏木涼。お前、あのペンネームはあの男から取ったんだろう？」
半ば怒鳴るように洋輔が言った。
由弥は反射的に答えていた。
「ち、違う」
「何が違う？　偶然なんてあるわけが無いだろう。お前アイツのことが好きなのか？　アイツに惚れてるんだろう」
由弥は自分が眉を寄せて、訝しい表情を作っているのを自覚した。洋輔は一体何を言い出すのか。涼とは六日前に会ったばかりで、でも、友人で、しかも男同士ではないか。好きとか惚れているとかいう次元の問題ではない。

真上にある洋輔の顔がより一層歪んだ。それは冷笑。
「初恋は実の姉、次は男か……お前もとことんバカだな」
洋輔はそう言うと、身体を由弥に押しつける。困惑する由弥の首筋に、唇を這わせてきた。
「や、やめろよっ」
「もう一度、思い出させてやる。お前は俺の奴隷だ」
由弥は必死に、抵抗した。だが、洋輔はいつ間にか、シャツの隙間から、腕を入れ、身体を撫で回し始める。
気持ちが悪い、鳥肌が立つ。由弥は洋輔が何をしようとしているのか知っている。二年前にもされたから。
由弥は必死で腕を伸ばした。
近くで硬い物が手に触れた。それを掴んで引き寄せ、思いっきり洋輔の頭にぶつけた。
それは本だった。いつの間にか床に落ちていたのだろう。重い本を頭にたたきつけられ、さすがに洋輔も呻いている。
その隙を見逃さず、由弥は洋輔の下から抜け出し、立ち上がるとドアへと向かって手を伸ばす。
ドアノブを掴んで捻ったとき、足首を掴まれた。
由弥は必死で、ドアが開く様に、ノブを捻ったまま外側へ押した。
それとほぼ同時に、由弥の身体は床を滑った。つかまれた足首を思い切り引かれたのだ。
胸を打ったが、痛いなどといっている暇は無い。
由弥の身体はそのままずるずると床を滑った。
「俺から逃げようなんて許さない」
由弥に馬乗りになった洋輔が言った。
「お前も、由布子も俺のもんだ」
押さえつけられた体はびくともしない。逃げられない。どんなに嫌でも、どんなにもがいても、逃げることなど出来ないのか？
由弥は絶望を見た気がした。
洋輔の手がシャツに伸び、シャツを引き裂いた。ボタンが幾つか

宙を飛んだのを見た。
「相変わらず醜い身体だな」
洋輔の目は胸元に落ちていた。そこには手術後の大きな傷跡があった。
「いやだ、離せ、助けて」
「黙れ」
怒気を含んだ声で洋輔が怒鳴る。それでも、由弥は黙らなかった。叫んで助けを求めた。
「助けて、涼、助けて」
頭の中には涼の名前しか浮かんでこなかった。
今更ながら、涼のいる部屋から一番遠い部屋にしたことを後悔した。
ドアを開けていても、この声が涼の眠る部屋まで届くとは思えなかったが、由弥は洋輔に口を塞がれるまで声を限りに叫んだ。

第九章　真実と現実

ふと、由弥に名前を呼ばれた気がして目が覚めた。
暗い部屋を眺めたが、由弥の姿があるはずも無く、涼はゆっくりと半身を起こした。
頭を掻いて、欠伸をする。
少し喉が渇いた。
台所に水でも飲みに行こう。
そう思って立ち上がった。
部屋を出てすぐ隣の、由弥の部屋に目をやった。しっかりとドアは閉じられている。
何となくさっき呼ばれたような気がしたが、やっぱり気のせいだったのだろう。
由弥はこのドアの向こうで眠っているはずだ。
ここへ来てもう六日たった。明日には過去へ帰ることになるのだ。
何か変な感じだ。
だが、いつまでも帰る日を先延ばしにするものでも無いと思った。
洋輔が由弥に何かするのではという思いが、涼の頭から離れないが、自分がいなければ、自分が関わらなければ、由弥も無事でいられるのでは無いか。そんな風に思うのだ。
自殺したあの男は言っていた。復讐しに来たのかと、俺が関わらなければ、由弥は何事もなく、無事に暮らせるのでは無いか。
だから、早く自分の時代に戻らなければなら無い。
何事も起こらぬうちに。
涼は台所まで来ると、食器棚からコップを取り出し、水を注いだ。蛇口からあふれ出た水は思いの外冷たい。それを喉に流し込んで一息ついた時だった。
何かが激しく倒れる音が聞えた気がした。あれは多分由弥の両親の寝室の方。

泥棒か？
涼は意を決して、音のした方角へと足を向けた。
その時、今度は悲鳴に似た声が聞こえてきた。
たすけて……
そう聞える。
この声はもしかして由弥？
涼は走り出した。
廊下を曲がった時、由弥の両親の寝室の、もう一つ奥のドアが少し開いている事に気づいた。
「助けて、涼！　助けて」
あそこだ！
涼は思い切りそのドアを開けた。
涼の目に飛び込んできたのは、仰向けに倒れた由弥の上に馬乗りになり、由弥の口を手で押さえている男の姿。
涼は切れた。
「てめー、何やってんだよ」
男の服を掴んで無理やり立ち上がらせると、思いっきり拳で顔を殴りつけた。男は勢い余って、床に尻餅をつく。
その姿が窓から入ってくる月明かりに照らされて、はっきりと涼の目に映った。
志藤洋輔……。
涼の中に沸々と怒りが込み上げてくる。
「おまえ、由弥に何やったんだよ。ふざけんな！　由弥はお前のフィアンセの弟だろうが」
そう怒鳴って、立ち上がろうとしていた洋輔に掴みかかった。
「煩いっ」
洋輔は掴みかかった涼を振り払うと、ドアに向かって駆け出した。
「待てよ、コラ」
涼がその後を追いかけようとしたとき、何かが涼の服を掴んでその動きを止めた。

振り向くと、顔面蒼白にした由弥が彼の服を掴んでいた。
「涼、行かないで」
か細い声で由弥はそう訴えてきた。涼はたまらなくなって由弥を抱きしめた。
由弥は震えていた。その振るえが彼を襲った恐怖の現われだと涼は思った。
より一層強く彼を抱きしめた涼は、由弥の痛いという声で我に返った。
慌てて体を離して、由弥と向き合った。
「由弥、お前殴られたのか？」
その時初めて涼は気づいた。由弥の頬が少し赤く晴れている。由弥は頷いた。痛々しいその姿に、怒りがまた蘇ってくる。
良く見ると服まで破かれているではないか。その破れた隙間から、浅く上下する胸板が見えている。
その時、涼は気づいた。由弥の裂かれた服の隙間から見える胸の辺りに、大きな傷跡があることに。
「由弥、その傷……」
言った瞬間、由弥は反応した。大きく身体を震わせると、破かれた服を懸命にあわせ、手で抑えて胸が見えない様に隠した。
「由弥？」
急にどうしたのかと、涼は由弥に問う。由弥は悲しげに乾いた笑みを顔に張り付かせた。
「気持ち悪いだろう？　醜いよな？　こんな傷」
「由弥？」
由弥が何を言いたいのか分からず、涼はまた名を呼んだ。
「アイツにも言われた。こんな傷がある以上お前は誰にも相手にされないって」
胸の傷以上に由弥は心に大きな傷を負っているのかも知れない。
それもあの志藤洋輔という男のせいで。
涼は由弥の腕を取った。服を掴んでいた手を無理やりはがす。

また服の合間から傷跡が露になる。
「涼」
困惑した由弥を半ば無視するように、涼はその胸元に視線を送る。
「由弥、この傷、心臓病の手術した時に出来た傷？」
涼の静かな問いに、由弥も困惑の表情を浮かべながら頷いた。
「この傷が出来たお蔭で、今こうして由弥が生きているんだよな」
「……」
「それを、俺が醜いなんて言うと思ったのか？　そりゃ、少しは驚いたけど、それだけだ」
「涼……」
「気持ち悪いなんて思うはず、無いじゃないか」
「……」
由弥の目に涙が浮かんだのを涼は見た。涼は何も言わずに由弥を引き寄せた。
自分の胸元に由弥の顔を押し付ける。
由弥は泣き出した。声を上げて泣き出した。
涼はそのままじっと由弥が泣き止むまで待つことにした。

どれ位経ったのだろうか。随分と長い時間が経った気がするが、正確なところは分からない。だが、由弥が大分落ち着いてきたのは事実だった。由弥は自分から、身体を離した。
「ゴメン、涼。また服濡らして」
そういえば、昨日もこうやって泣いている由弥を抱きしめたっけと思い出す。そして涼は由弥に静かに声を掛けた。
「由弥。一体どうしてこんなことになったんだ？」
本棚を背もたれ代わりにして座り、由弥を見る。由弥も並んで同じように本棚に背を預けて口を開いた。
「そうだな、助けてもらったし、もう話してもいいかな……」
独り言のように由弥は小さくそうもらすと、涼に顔を向けた。
「少し、長くなるけどいいかな」

涼はもちろんという意味を込めて頷いた。
由弥は少し、黙って何かを考えてるような顔をしていた。そして、静かに話し始めた。
「涼は軽蔑するかも知れないけど、僕は本気で姉さんを愛してた」
「え？」
いきなり思いもかけない言葉を言われて、涼は目を見張った。胸が少し痛んだ気がしたが、その理由は分からない。
「姉弟愛じゃなくて？」
「そう、一人の女として姉さんを愛してた。小さい頃から病室に一人でいることが多かった僕に、優しく接してくれる姉に本気で思いを寄せてた。」
「……」
「だから、姉さんがアイツを家に連れて来たときは驚いた。僕の元家庭教師だったしね。でも、あの頃は。僕はアイツをいい先生だと思っていたから、素直に姉の幸せを喜んだよ。本当は凄く辛かったけど、自分の全く知らない人物に取られるくらいなら、まだ先生でよかったとも思っていたよ」
そこで、由弥は一つ息を吐いた。涼は黙って由弥を見つめていた。
「僕自身、姉さんに気持ちを打ち明けるつもりも全くなかったし、これが姉さんを諦めるきっかけになるのならそれでいいと思った。だから、僕は先生とも仲良くしようとした。先生は翻訳家で小説のことにも詳しかったし。僕は、先生にアドバイスを貰いながら、小説を書いた。姉さんを忘れるためにも小説はいい逃げ場になってた」
いつの間にか、由弥は洋輔のことを先生と呼んでいた。いつもそう呼んでいたのだろう。由弥は思い出すようにゆっくりと言葉を続けた。
「書き上げた小説を先生に渡した。見てもらって批評を受けようと思って。でも、先生は中々その小説を返してくれなかった。それまでは毎日のように、姉さんに会いに来ていたのに、全く姿を現さなくなった」

「由布子さんとケンカでもしていた？」
涼が口を挟むと、由弥は苦笑して首を横にふった。
「僕もそう思ってた。姉さんに聞いたら、急な仕事が入ったのだと言ってたから、僕も疑わなかった。それから、二ヶ月近くたってから、先生がやったことに気づいたんだ。アイツは僕の小説をそのまま自分が書いたと偽って、出版社に売り込んでいたんだ。そしてそれが、ある出版社の目に留まって本になることになった」
「……」
涼は驚いていた。絡まっていた糸が少しほぐれたような気がした。
由弥と初めて会ったとき、由弥は涼に、自分は小説を書いている。ペンネームは君の名前と同じ字を書くんだ。そう言っていた。
だから、涼はその時、由弥が由香の父親じゃないかと疑ったのだ。
そしてその後、洋輔の姿を見て洋輔が由香の父だと確信したものの、何故、名前が違うのかと疑問にも思っていたのだ。だから今朝賞を取ったという小説の著者名が夏木涼になっていたことに驚いてもいたのだ。
「もしかして、アイツはお前の使っていたペンネームもそのまま使って本を出した？」
涼の問いに、由弥は頷いた。
「姉さんが大喜びでその小説を僕にくれたんだ。それで僕は事実を知った。驚いて、そして腹が立った……」
それはそうだろう。自分が精一杯書いた小説を盗まれたのだから。
「だから、僕は……」
由弥の様子が少し変わった。声が震えている。少し怯えている様にも見えた。
「由弥？」
涼は床に下された由弥の手に自分の手を重ねた。一度驚いたように目を開けて由弥は涼を見た。だが、由弥は手を振り払うことはせずに、幾分落ち着きを取り戻したようにまた口を開いた。
「だから僕はアイツの家に押しかけて問いただした。どういうこと

だって。出版社に行ってアイツのやったことを告発するって言ってやった。そしたら、アイツ、僕を……」
陵辱したんだと由弥は告げた。
「必死で抵抗したけどダメだった。病み上がりで体力だって無い僕に、抵抗できるはずもなかったんだ」
悲しみをこらえるように由弥はそう言った。涼にはそんな由弥にかけてやる言葉が見つからなかった。
「アイツは事が終わった後言ったよ。君の姉さんは弟が自分の恋人と寝たと知ったらどう思うだろう？　傷つくだろうな。君は姉さんに嫌われる、憎まれるかも知れない。あいつはそう言ったんだ」
「何だよそれ、滅茶苦茶じゃないかよ。あいつが無理やり暴行したんだろう。お前は何も悪くないじゃないか。知られて困るのはあいつのほうだろうが」
思わず涼は声を荒げていた。由弥はその声を無表情で聞き流していた。
「でも、僕にはその言葉は効いたよ。僕は姉さんを愛してた。姉さんの傷つく顔なんて見たくなかったし、憎まれるなんて耐えられなかった」
「由布子さんはお前を憎んだりしないだろう。憎むならあいつの方を憎むはずだ」
涼の声に、由弥はきつい表情を見せた。
「人間の心なんてそんな風に割り切れるものじゃない。姉さんは本気でアイツを愛してたし、僕の話しを聞いてくれるとも思えなかった。僕には姉さんが全てだったんだ」
「……」
「だから、僕はアイツの望むとおりに、アイツのゴーストライターをやってきた。黙ってやっていれば、アイツは僕に危害を加えなかったし、姉さんもいつも幸せそうに笑っていられる」
「じゃあ、もしかして、賞を取った小説も由弥が書いたもの？」
涼が聞くと由弥は頷いた。

「そう、僕が書いたんだ。でも、さすがに昨日は辛かった。姉さんは大喜びだし、君はアイツのこと褒めてた。本当は僕が書いたのに、って騙していることへの後ろめたさも合ったけど、それ以上に悲しかった」

それで、由弥は昨日あんなにイライラしていたのか。

そういえば、あの時、洋輔は由弥のお蔭で賞が取れたといっていた。アレは苦しんでいる由弥をみてその反応を楽しんでいたのだろう。

「本当は僕が書いたんだって、大声で言えたらどんなにいいだろうって思った。涼に嘘を付いているのがとても辛かった。涼は僕に全て話してくれたのにって、辛かった。だから涼に恥じないように、涼みたいに強くなろうって思った。逃げてばかりいてはいけないって。全てが壊れることになっても、僕はもう、このまま黙っていたくないって思った」

そこまで一気に言い募り、由弥は顔を俯けた。

「だから今日、アイツをここに呼び出して言ったんだ。もう、アンタの言いなりにはならないって。だけど、結局、こんな状況しか生まなかった」

静かに告げられた言葉。

涼にはかける言葉が見つからなかった。

ずっと独りで耐えてきた由弥。

ずっと悲しみの中にいた由弥。

自分にはそんなところ全く見せず、人の幸せのために生きていた由弥。

きっと孤独だったのだろう。辛かっただろう。それが分かるだけに、どんな言葉をかけても陳腐にしかならないような気がした。

涼は俯いた由弥の頬に手をやった。

驚いた由弥は顔を上げ、涼を見た。

ゆっくりとその由弥の唇に、唇を重ねた。

軽く触れ合わせただけで、すぐに離した。

「涼？　どうして」
困惑した様子で由弥が涼に問いかける。涼自信も困惑していたが、言葉はしっかりと出た。
「どうして抵抗しないんだ？　由弥」
「分からない。でも、アイツにされた時みたいに嫌じゃなかった……」
涼はもう一度、由弥の唇を自分の唇でふさいだ。
涼もずっと孤独だった。
母に捨てられ、父に蔑まれて育った涼は、いつも癒える事のない孤独を抱えていた。
何人もの女性と寝ても、心が満たされたことは一度としてなかった。
悲しくて、辛かった。
でも、誰にも話など出来なかった。ここにいる由弥以外には。
由弥だから出来たのかもしれない。同じように孤独を抱えていたから。
自分達は似ているのかもしれない。心に傷を負っているのに、それを塞ぐ術を持たない二人。
だが二人でなら孤独を感じなくて済むかも知れない。例えそれが一時の夢だとしても。
涼はゆっくりと唇を離した。深いキスに互いに息を乱していた。
「明日には、涼。帰るんだよな」
荒い息の下で由弥が言った。涼は頷いた。
「ああ、帰るよ。俺も、いつまでも逃げてばかりいちゃいけないんだ……」
自分に言い聞かせるように涼はそう言った。
由弥は笑った。優しい、だが寂しげな笑顔だった。
「涼を忘れたくない……」
「俺も、由弥を忘れたくない……」
涼はゆっくりと由弥の腕を引っ張った。由弥は抵抗しなかった。

二人の影が重なる。
窓の外。
月だけが彼らをただ静かに見つめていた。

第十章　別れ

由弥は目を開くと同時に、黴くさい臭いをかいだ気がした。
身体を起こして、周りを見回すと、そこが書斎だと分かった。
昨日あのまま眠ってしまったのだろうか？
どうやらそうらしい。由弥の傍らでは、涼が静かな寝息を立てていた。
由弥は涼の安らかな寝顔を見て微笑み、窓の外に目を転じた。
空は少し白んでいる。もうすぐ夜明けなのだろうか？
それならばまだ起きるのには早いだろう。もう少し、涼の隣で眠っていようか。
由弥はそう考えたが、喉が渇いているような気がして立ち上がった。水を飲んで、またここに戻ってこよう。涼のもとに。
久しぶりに安心して眠ることが出来た。二年前から心安らかに眠れたことなど一度だってなかったのに。
そんなことを思ってドアを開けた瞬間、由弥は咳き込んだ。目に涙も溜まる。由弥は驚いて、ドアを閉めた。
暗い廊下に、何故か煙が充満していた。
火事か？
まさかと思ったが、その可能性は否定できない。あれほどの煙が廊下に満たされるのは火事以外に考えられない。
だが、火の手は見えなかった。煙で視界が悪いということもあったが、火の爆ぜるような音も聞えはしなかった。
動揺している由弥の目に、ドアの隙間から、煙が流れ込んでくるのが見えた。
由弥は慌てて、ドアから離れた。
そして涼のそばで膝をつくと涼をたたき起こした。
「涼、起きて、涼」
「んっ？　由弥」

ゆっくりと涼が由弥の顔に目の焦点をあわせて、驚いたように起き上がった。
「どうした？　また何か……」
涼が言い終わる前に、由弥は叫んだ。
「涼、火事だ」
そう言って、ドアを示す。ドアから煙が流れ込んできている。その様子に、涼の眠気も吹き飛んだようだ。
「一体どうして？」
「そんなこと言っている場合じゃないよ。逃げないと」
由弥が、半ば怒鳴るように言うと、涼も頷いた。
「廊下、煙が凄いんだよな。だったらこの窓から出るか」
涼の言葉に、由弥は首を振った。
「ダメだよ。この窓は開かないように出来てる」
「どうして？」
「一度、風で大事な書類が飛んでいってしまったことがあってね、その時、父さんが窓を打ち付けてしまった」
涼はちっと舌打ちした。そうこうしている間にも、煙はどんどんと部屋に入ってくる。息苦しくなってきた。
「涼、とりあえず、脱衣所まで行こう」
由弥の提案に、涼が妙な顔をした。
「どうして？」
「あそこには大きな鏡がある。あの鏡なら涼を未来に返してあげることが出来る」
「バカ言うなよ、こんな状況で帰れって言うのか？　お前を置いて？　ふざけんな」
涼は怒鳴った。だが、由弥はひかなかった。
「だからって、いつまでもここにいて、二人して死んでも洒落にならない。それに、風呂場の窓から僕は逃げることが出来る。君がここに残って、逃げることが出来たとしても、警察とかが来てややこしいことになる可能性が高い。だったら今のうちに君を未来に帰し

たい」
由弥の必死の言葉に、涼は暫く考えるようにしていたが、小さくこう答えた。
「本当に、お前も逃げ出せるんだな」
由弥はしっかりと頷いた。
二人は大きく息を吸い込むとドアを開けた。口元を腕で覆うが、煙は容赦なく二人の口に入り込む。途端に咳が出るが、そんなことに構ってはいられない。
酷く悪い視界の中、由弥は、涼に手を引っ張られながら、廊下を進む。
煙ばかりで、火の手は見えない。だが、確実に煙の量は増していた。
やっとの思いで脱衣所にたどり着く。慌てて扉を閉めて、煙を追い出す。ここはまだ差ほど煙に犯されていなかった。
二人して、荒い呼吸を繰り返し、咳をした。
それが少し落ち着いてから、由弥は脱衣所の鏡の前に立った。
昔、幾度となくしてきたように、鏡の前に手をかざした。
涼はそんな由弥をじっと見つめていた。だが、話し掛けてはこなかった。
由弥は目を瞑り、集中した。
そして鏡の中に映る由弥の姿が揺れた。
渦を巻くように由弥の姿が鏡の中から消えた。

その様子を涼はただ唖然としてみていた。前の時と同じ現象が起こっていた。
鏡が赤く光りだした。
由弥は目を開けた。
「涼、鏡の前に立って。自分のいた時代を思い出して、帰りたいっ

て念じるんだ」
「由弥、やっぱり、俺……」
涼の言葉を最後まで聞かず、由弥は首を横に振る。
いつの間にかここにも、煙がゆっくりと入ってきている。呼吸が苦しくなる、目が痛い。
「涼、僕は大丈夫だから。三十年後にまた逢おう」
由弥はそう言って微笑んだ。
「由弥……」
「涼、君が早く行ってくれないと僕も逃げられない」
由弥の言葉に、涼は決心する。鏡に腕を伸ばした。もし自分が躊躇していたせいで由弥が死ぬようなことになったら。そんなことが、あってはならない。
「由弥。三十年後に、またあの公園で」
「ああ、逢えるのを楽しみにしてる」
その声を耳にした直後。涼は身体が鏡の中へ引っ張られるのを感じた。
涼のさよならと言う言葉は由弥に届いただろうか。
涼は浮遊感を覚えた後、身体が宙に放り出されるのを感じた。そしてすぐに痛みが襲った。
鏡から抜け出たのだと分かったのはそのすぐ後。
ゆっくりと周りを見回すと、そこは由弥の家ではなく見覚えのある公園だった。ここから自分の住むマンションも見える。
戻ってこれたんだと思った瞬間、視界が揺らいだ。気分が悪い。吐き気がする。
煙を吸いすぎたのかも知れない。
涼は気を失った。気を失う直前涼の口から漏れたのは由弥の名前だった。

由弥は涼が鏡の中に吸い込まれたのを確認してほっとする。鏡はすでにいつもの風景を映し出していた。
その時、何か音が聞えた気がした。何かが倒れたか、ぶつかったかした音に思えた。
誰かいるのか？
由弥は訝った。いるとしたらこの家に火をつけた犯人だろうか。
それとも火事に気づいて誰かが僕らを助けに来てくれたのだろうか。
そう思ったとき、ドアが勢い良く開いた。
現れた人物をみて、由弥は目を見張った。
何故、まだこの男がいるんだ。
涼に殴られて帰ったんじゃなかったのか。
「由弥、お前もここから逃げる気だったのか？」
「何で、あんたが、ここに」
そう言った時、由弥は気づいた。洋輔が何かを手に持っていることに。それは由弥の大切にしているノート。小説のネタを書き込んでいるノートだった。
「それ、どうして……」
「これさえあれば、お前がいなくても俺はやっていけるんだ」
「お、お前が火をつけたのか？」
洋輔は否定も肯定もしなかった。ただ狂ったように笑い出した。
「お前などいなくても、俺は、俺は、ははははは」
洋輔は笑いながら、由弥の首に手を伸ばし、締め付けた。
ただでさえ、煙で朦朧としている意識はすぐに由弥から離れていく。
由弥は意識がなくなる寸前に、鏡を見た。そこには苦痛に顔をゆがめた自分しか見えなかった。

次に意識を取り戻した時、由弥は自分が既に死んでいるのだと思った。目を開けているのに周りは暗いし、息苦しい。
咳が出る。
咳が出る？
由弥は身体を起こした。
彼の身体を半ば包みこむように、黒い煙が覆っている。少しからだを動かしただけで、吐き気が込み上げてきて、由弥は嘔吐した。
それが収まると、由弥は袖で口を覆って、周りに目を凝らす。まだ、ここは脱衣所のようだ。
ドアの向こうが赤い。それに熱かった。火がもうそこまで迫ってきているのだろう。
由弥はゆっくりと立ち上がった。壁に手を付いて、風呂場まで行こうとしたが、身体が言うことを聞かない。酷く疲れている。
それでも懸命に手を壁に付いて前進する。
その時、ふと、壁とは別の感触が掌に伝わってきたのを由弥は感じた。
つるつるとした感触を確かめて、それが涼を飲み込んでいった鏡だということを知る。
由弥は涼にみせたように、もう一度目を閉じて、念じた。
涼に逢いたい。
涼のいる世界へ行きたい。
一日に二度もこの力を使うと身体が耐えられないことは分かっていた。
だが、どうせ死ぬのなら、涼のいる世界で死にたいと思った。
だから念じた。
すると、鏡が赤く光った。由弥は身体が鏡の中に引きずりこまれるのを感じた。そして、今度は何かにたたきつけられた。
地面に落ちたのだと気づいたのは、土の匂いを感じたから。だが、由弥は目を開けることが出来なかった。ここが本当に涼のいる世界

かどうかは分からなかった。
そして由弥は意識を手放した。
だから由弥は知らなかった。ここが二千三年六月一日だったということに。このときの涼はまだ、由弥の存在を知らない……。
それを由弥が知ったのは三日後の事。収容された病院で、意識が回復してからだった。

エピローグ

香田洋輔は気づいた。否、気づいてしまったという方が正しいだろうか。

彼の家の周りや、行く先々であの青年とそっくりな人間がいることに。

名前は由弥。

三十年前。

自分が殺したはずの人間だった。

あの火事で全て燃えた家の中から、由弥の遺体も、夏木涼の遺体も発見されなかった。だが二人は焼死したとされていた。骨すらも高温の熱で溶かされたのだと、警察は言っていた。夏木涼に至っては身元すら確認が出来なかった筈だ。

その後、失意の由布子や由布子の両親を慰め、由布子と結婚した。そして、今は由布子も、その両親の遺産も手に入れた。

全てが上手くいっていたはずだった。

それが今更、帰ってきたというのか？　それもあの頃と変わらず、同じ姿で？

洋輔は恐ろしいものを感じた。そんな訳は無いと思っていても、その考えは拭うことが出来ないでいた。

あいつは自分に復讐しに来たのだろうか。

あいつから全てを奪った俺に、復讐しに。

今度は俺から全てを奪う気か？

この三十年、洋輔は確固たる地位を気づいてきた。彼の名を知らぬ者は殆どいないと言っていいに違いない。メディアにも良く顔を出している。

そんな今になって、何故、アイツが現れるのだ。

アイツに何もかも喋られたら、俺は何もかも失ってしまう。

最愛の妻も娘も。地位も名誉も全て、何もかも。

頭を抱えた洋輔に、声が掛けられた。
「お客さん。つきましたよ」
洋輔はのろのろと顔を上げた。
ここはタクシーの中だった。自分の考えに没頭していて忘れていた。
洋輔は怪訝そうな顔をしている運転手に料金を支払うと、タクシーを降りた。
大きな自宅を前に、深呼吸して自宅のドアを開けた。
中には娘がいるはずだ。一人娘だ。名前は由香。由布子の由の字を取って付けた名前だ。
母親に似て、とても可愛い顔立ちをした娘だった。彼女は洋輔の自慢だった。
彼女に動揺した姿など見せることは出来ない。彼女の前ではいつも毅然とした優しい父親でいなければ。
洋輔はドアを開け、中に声を掛ける。
「由香？　由香いないのか」
声を掛けたが返事は無い。
家の中も薄暗い。まだ家に帰ってきていないのだろうか。門限は九時だと言っているのに。
洋輔は腕にはめた時計を見る。時刻は午後九時二十分を回っていた。
だが、居間の方で音が聞えた。やっぱりいるんじゃないかと思い、靴を脱いで廊下に上がろうとしたとき、男物の靴があることに気づいた。
誰かいるのか？
洋輔は訝りながら廊下に上がって進む。角を曲がると、居間に明かりがついていることに気づいた。
「由香、お友達か」
中にいるはずの由香に声を掛ける。由布子は今日主婦仲間とカラ

オケに行っているはずだ。
居間のドアを開けると、ドアを背に、ソファーに座っていた由香が立ち上がって、振り向いた。
お帰りなさいという娘に、洋輔は答えることが出来なかった。
こちらに背を向けて座っている人物に目を奪われていた。
見覚えのあるシルエット。三十年前、たった数日しか会わなかった人物に似ているような気がした。
その人物がすっと立ち上がって振り向いた。
「始めまして」
その青年は言った。聞き覚えのある声。自分が焼き殺したはずの男がそこに立っていた。
忘れようとしても忘れられなかった顔。由弥を襲った時、頬を殴って怒鳴りつけてきた男。
その男が三十年前と変わらず、同じ姿でそこに立っていた。それも、娘に寄り添うように。
由香が必死に自分に何か言っていたが全く洋輔の耳には入っていなかった。
「なぜだ？」
洋輔は口走っていた。
「なぜ、お前まで蘇る。なぜ、今も同じ姿なんだ」
洋輔はそう怒鳴っていた。由香が驚いて、自分を呼んでいるが、もう構っていられる余裕がなかった。
「娘に何をする気だ。復讐だろう。そう何だな」
洋輔はそう怒鳴ると夏木涼の肩を掴んで、ドアへ突き飛ばした。
大きな音をたてて、夏木涼はドアにぶつかる。顔を顰めた夏木涼に、洋輔は言った。
「二度と俺たちの前に現れるな。出て行け」
そう言うと、夏木涼は一度洋輔を睨んだが、何も言わず、部屋を出て行った。
荒い息が口から漏れる。良かったと思った。由香に何かされてい

たらと思うとぞっとする。
「お父さん。ねえ、何なの？　どうしたのよ」
由香が洋輔に抗議するような口調で、洋輔に言う。洋輔は由香を見た。由香は泣きそうに顔をゆがめている。
「酷いわ。お父さん。夏木君は何もしていないのよ」
「由香、お前は知らないんだ。あいつはとんでも無い奴だよ。お前が無事でよかった」
洋輔はそう言って、娘を抱き寄せようとした。
だが、由香はそれから身をそらし、部屋を駆け出した。
「由香」
「夏木君に謝ってくる。お父さんはそこで待ってて」
その声に洋輔は慌てた。追おうとして足がもつれて、転んだ。
そのうちに、由香が家を出て行く音が聞えてきた。
洋輔は転んだ時に打ち付けた足が痛むのを感じたが、それでも立ち上がり、由香を追って家を出る。
家の前の路上に飛び出した洋輔は、由香がどちらに向かったか分からず、左右を確認しようと、まず、左を向いた。
そして、頭が真っ白になるのを感じた。
そこに、一人の男が立っていた。
三十年前と変わらない美貌を持つ青年。
「由弥……」
洋輔はその人物の名を呼んだ。最初驚いた表情をしていたその人物は、ゆっくりと口を開いた。
「覚えていたんだね。先生」
昔、由弥に先生と呼ばれていたことを思い出した。由弥の才能に嫉妬して、由弥の全てを奪ってやろうと行動を起こすまでは、由弥は自分を先生と確かにそう呼んでいた。
「何故、お前がここにいる？　お前は死んだはずだ」
洋輔はそう怒鳴っていた。
由弥は声を出さずに笑った。乾いた笑みだった。

「そう、先生が殺したんだよ」
「……」
「先生は姉さんと結婚したんだね。姉さん、年を取ってた」
「逢ったのか由布子に」
洋輔はそう聞き返していた。
だが、由弥は首を振った。悲しそうにまた笑った。
「まさか。こんな姿で逢えるわけが無いじゃないか。姉さんを困惑させるわけにはいかない」
「そうか」
内心ほっとした。由布子に、やっと作った自分の家族に、自分のしたことを知られるわけにはいかなかった。
「娘さんも綺麗だったね。幸せそうだった。姉さんに似ていた」
言われて由香のことを思い出した。由香は夏木涼の後を追っていったはずだ。やはり、夏木涼は由弥と共謀して自分に復讐しに来たのだと確信した。
「由弥、お前何が言いたいんだ」
だからそう聞いた。
「先生はどう思う？」
由弥に聞かれて戸惑った。だが、はっきりと洋輔は由弥に言った。
「お前は俺に、復讐しに来たのだろう。そうなんだろう」
洋輔の声を聞き、由弥は顔を歪ませた。
「……あなたは何も変わってないんだな。先生。あの頃と少しも変わってない。三十年も経ったのに……」
「煩い、煩い。じゃあ、何故お前はここに、今頃現れたんだ」
もう時効だろうと洋輔は叫んでいた。
住宅街だからだろうか、近くに歩く人影はない。だが、確実に隣近所にはこの声が届いてしまっているだろう。だがもう洋輔は構わなかった。
しかし、次に用意していた言葉は発せられることはなかった。
由弥の冷たい目に射られて、言葉が出てこなくなったのだ。

「先生。やっぱりあなたは最低だよ。僕が復讐すると思っているならそう思っていればいい。ずっとそうやって、僕の影に怯えて生きていけばいいんだ」
そう言って、由弥は踵を返すと、歩き出した。
洋輔はその後を追う事が出来なかった。由弥の後姿をただ、呆然と見詰めていた。

涼が二千三年に帰ってきてから既に二週間経った。暦は七月に入り、日々気温は上がっていく。
少し汗ばむ陽気の中、涼は二週間ぶりにこの公園へ来た。青い木々に囲まれた公園は閑散としている。遊具の置いてある場所から離れた広場だからなのか、今がまだ早朝だからなのかは分からない。

涼は三十年前から戻ってきてすぐに、入院した。どうやら煙を吸いすぎたらしい。
父は二日間目覚めない涼にずっと付き添っていてくれたそうだ。目が覚めると、父親の顔があった。
目覚めた自分に良かったと泣いた父を、涼は不思議な思いで見つめたものだった。
いつも自分を蔑んでいた父が、自分のために泣いているのが信じられなかった。
だが確かに涼は聞いた。父親が言った言葉を。
「良かった。お前までいなくならなくて」
その言葉がいつまでも涼の胸に残っていた。

由弥はどうしているのだろうか。
入院していた時も、そう思っていた。由弥はこの時代のどこかに生きているとそう信じていた。

だからこうしてこの公園へと足を運んだ。
帰る間際にこう言った。
またあの公園で逢おうと。
由弥が三十年間その言葉を忘れずにいてくれていれば、ここにこうしていれば、いつかは会えると信じていた。
だが、今この場所に立っているのは涼だけだった。
涼はあの手洗い場に足を向けた。
全ての始まりの場所。
涼は何となく手を伸ばして蛇口から水をだした。水に手を付けると、冷たいと思っていた水は生ぬるかった。
その時、風が吹いた。
温かい風が、涼を撫ぜて通り過ぎた。
涼は風に乱れた髪を直そうと鏡を覗き込んだ。
そして、涼は目を見張った。鏡に映った自分の背後に、こちらを見ている人影があることに気づいた。
慌てて振り向いた涼は、その姿を目に止めた。
「嘘だろう？」
涼は思わず声を出していた。

三十年前と変わらぬ姿で、その人物はそこにいた。

由弥がそこに立っていた。

エピローグ（後書き）

ここまでお付き合いいただき、本当にありがとうございました。

このお話は、今回で最終回となります。
いかがでしたでしょうか。自分的には処女作ということもありまして、お気に入りの作品の一つです。
まあ、文章等。いろいろと拙さの目立つ作品ではありますが。今も、対して変わっていないような気もしますけど。。。

失礼。話を変えます。
今回のお話は、最初。もっとライトな感じで考えておりました。タイムトラベルものを一作くらい描いてみたいなぁと思って考えていたのですが、最初のでだしで話の方向がはじめに考えていたものからずんずんずれていってしまったんですよね。
こんなに暗くなるとは。

基本私の書く話は暗いものが多い気がします。いつか明るい話を書いてみたいものです。

ことば企画の作品も書き終わりまして。次回はまた企画作品。
春の花と花言葉で小説を書くという企画の作品を執筆予定です。

それでは、また。
お逢いできることを願って。
愛田美月でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0394g/

現在、未来、過去と海

2010年10月8日14時48分発行